

# 横俵遺跡群 VI

1 9 9 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団







# 横俵遺跡群 VI



1 9 9 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



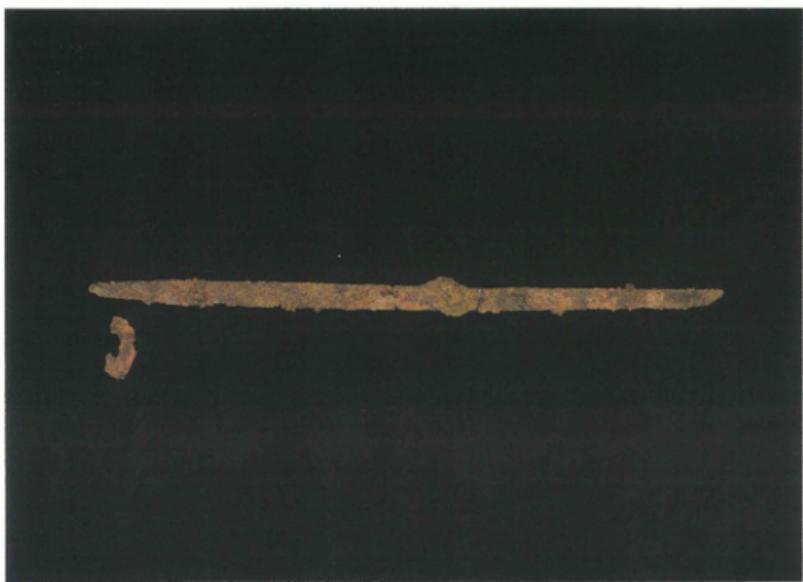


1. 赤城山と横俵遺跡群



2. 今年度調査区全景





3. 熊の穴II遺跡M-16号墳出土の鉄刀



4. 熊の穴II遺跡出土の土器群



## はじめに

群馬県前橋市は、関東平野の北西に位置し、坂東太郎で名高い利根川が市街地を貫流する、水と緑に恵まれた人口28万余を擁する県都であります。その歴史は古く、古代より上野国の政治経済文化の中心として発展してきました。

特に、横穴遺跡群が所在する前橋市東部の荒砥地区は、名峰赤城山の南麓に広がる自然気候条件に恵まれた場所で、今からおよそ22,000年前から人々が住んでいた痕跡が確認される、遺跡の宝庫と言える所です。

この地区に、前橋工業団地造成組合が大規模な工業団地を造成することとなり、埋蔵文化財の確認調査の結果、開発予定地の多くが遺跡地であることが判明しました。開発か保存かの協議により、現状保存不可能な場所を昭和63年度から発掘調査を実施することになりました。

昨年度までの調査では、前橋市では最古と言えるナイフ形石器の発見、縄文時代後期の住居址に取り囲まれた25基の配石遺構、総数約50基におよぶ横穴式石室を有する古墳群の検出等、旧石器時代から近代に至るまでの様々な遺構・遺物を発掘することができ、地域の歴史を解明する貴重な資料を得てきました。

調査の最終年度となった本年度の調査は、昨年度まで調査が不可能であった箇所という限られた範囲で、しかも短期間でしたが、古墳5基・住居址3軒・炭窯1基等を検出し、古墳の石室から直刀1振りを発見するなど多大な成果を上げ終了することができました。

最後になりましたが、5年間にわたる調査を実施するにあたり、御理解と御協力をいただきました前橋工業団地造成組合及びプラス株式会社の方々、並びに発掘調査・整理作業に従事していただきました作業員の方々に対し厚く御礼申し上げます。

本報告書が荒砥地区の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考となれば幸いに存じます。

平成5年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 有坂 淳

## 例　　言

1. 本報告書は、前橋工業団地造成組合（管理者 小寺弘之）が造成する荒砥工業団地に係る  
上横儀遺跡群発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県前橋市西大室町57-3番地ほかに所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 有坂 淳が施工者前橋工業団地造成組合  
管理者 小寺弘之と委託契約を締結し実施した。  
調査担当者および調査期間は以下の通りである。  
発掘・整理担当者 郡所敬尚・新井真典・上野克巳（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）  
試掘・発掘調査期間 平成4年5月6日～平成4年6月8日  
平成4年10月5日～平成4年10月7日  
整理・報告書作成期間 平成4年10月8日～平成5年3月25日
4. 本書の原稿執筆・編集は郡所・新井・上野が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部  
シゲ子・桐谷秀子・鈴木民江・田口桂子・多田啓子・堀越晴子・柳井晶子の協力があった。
5. 石器石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会員）にお世話になった。
6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

## 凡　　例

1. 掘戻中に使用した北は座標北である。
2. 掘戻に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（宇都宮）と1/2.5万地形図（大胡）を使用  
した。
3. 各遺跡の略称は4E18（上横儀遺跡）、4E24（熊の穴II遺跡）である。
4. 各遺構の略称は次の通りである。  
M…古墳、H…土師器使用の住居址、K…炭窯址
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。  
遺構 住居址…1/60、古墳…1/40・1/120、全体図…1/500  
遺物 土器・石器…1/3
6. スクリーントーンの使用は次の通りである。  
遺構断面図 As-B…濃点  
遺物実測図 繊維含有土器の断面…点、須恵器断面…黒塗

## 目 次

### はじめに

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	3
2 歴史的環境	4
III 調査の経過	
1 調査方針	6
2 調査経過	8
IV 層序	9
V 古墳時代の遺構と遺物	
1 古墳	10
VI 奈良・平安時代の遺構と遺物	
1 住居址	12
VII その他の時代の遺構と遺物	
1 炭窯址	13
VIII 成果と問題点	14

## 図 版

口絵 1 赤城山と横俵遺跡群

口絵 2 今年度調査区全景

P L. 1 熊の穴II遺跡 M-16号墳

2 熊の穴II遺跡 M-16号墳

3 熊の穴II遺跡 M-17号墳

4 上横俵遺跡 M-4号墳

5 熊の穴II遺跡 H-2・3号住居址

6 熊の穴II遺跡 H-2号住居址

口絵 3 熊の穴II遺跡M-16号墳出土の鉄刀

口絵 4 熊の穴II遺跡出土の土器群

P L. 7 熊の穴II遺跡 H-3号住居址

8 熊の穴II遺跡 H-4号住居址

9 熊の穴II遺跡 H-4号住居址

10 繩文時代の土器・石器

11 古墳～平安時代の遺物

12 古墳～平安時代の遺物

## 挿 図

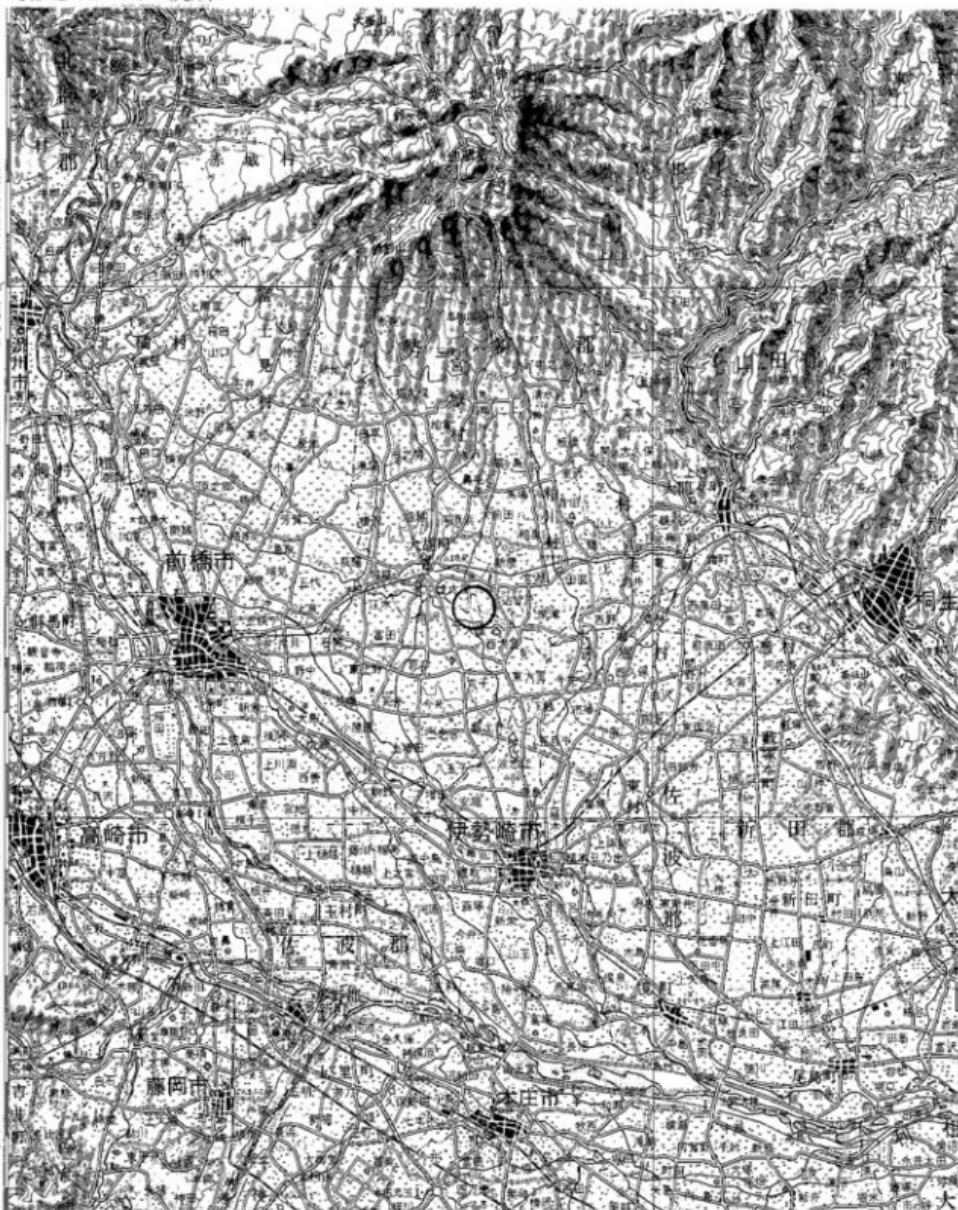
	頁
Fig. 1 横俵遺跡群の位置	vi
2 横俵遺跡群調査経過図	1
3 横俵遺跡群位置図	2
4 横俵遺跡群周辺遺跡図	5
5 グリッド設定図	7
6 発掘調査経過図	8
7 熊の穴II遺跡標準土層図	9
8 赤城山南麓の流れ山と周辺の古墳群	18
9 熊の穴II・上横俵遺跡全体図	21・22
10 熊の穴II・上横俵遺跡構造全体図	23
11 M-4・16号墳墳丘図	24
12 M-2号墳墳丘図	25・26

	頁
13 M-11号墳墳丘図	27
14 M-16号墳石室平面図	28
15 M-16号墳石室床面図	29
16 M-4号墳石室平面図	30
17 M-4号墳石室床面図	31
18 H-2号住居址	32
19 H-3号住居址	33
20 H-4号住居址	34
21 K-3号炭窯址	35
22 繩文時代の遺物	36
23 古墳時代以降の遺物	37・38

表

	頁		頁
Tab. 1 橫僕遺跡群報告書一覽	17	3 繩文時代石器觀察表	20
2 讀文式土器觀察表	20	4 古墳～平安時代遺物觀察表	20

横依遺跡群の位置（丸印）



1:200,000 宇都宮

vi

0 5 10 15 20 千メートル

## I 調査に至る経緯

横俵遺跡群の発掘調査は前橋工業団地造成組合（管理者 小寺弘之）から依頼された荒砥工業団地予定地の約55haを対象に昭和63年度から実施されているものである。

昭和63年度は試掘調査、平成元年度は調査団直営・委託で3パーティ、2年度は直営・委託1パーティずつ、3年度は直営のみで開発優先順位の高い場所から順に本調査を実施してきた。

5年次にあたる平成4年度の調査は、平成4年5月6日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。調査範囲は、熊の穴及び中横俵の住宅下部分（合計面積：約3,000m<sup>2</sup>）であり、住宅の移転が済んだ場所から順に調査を行わなければならなかったため、春・秋の2回に分けて実施した。現地での発掘調査は熊の穴・上横俵部分を平成4年5月6日から6月8日まで、中横俵部分を10月5日から10月7日まで行い、整理作業は平成4年10月8日から平成5年3月25日までであった。なお、今年度調査を実施した遺跡の名称は、各々が隣接している遺跡の名称を踏襲し、それぞれ熊の穴II遺跡、上横俵遺跡とした。

■ 今年度調査区(4E18・24)

■ 熊の穴II遺跡(3E24)

■ 上横俵遺跡(3E18)

■ 熊の穴遺跡(3E19)

■ 熊の穴II遺跡(2E24)

■ 上横俵遺跡(1・2E18)

■ 熊の穴遺跡(2E19)

■ 熊の穴遺跡(1E19)

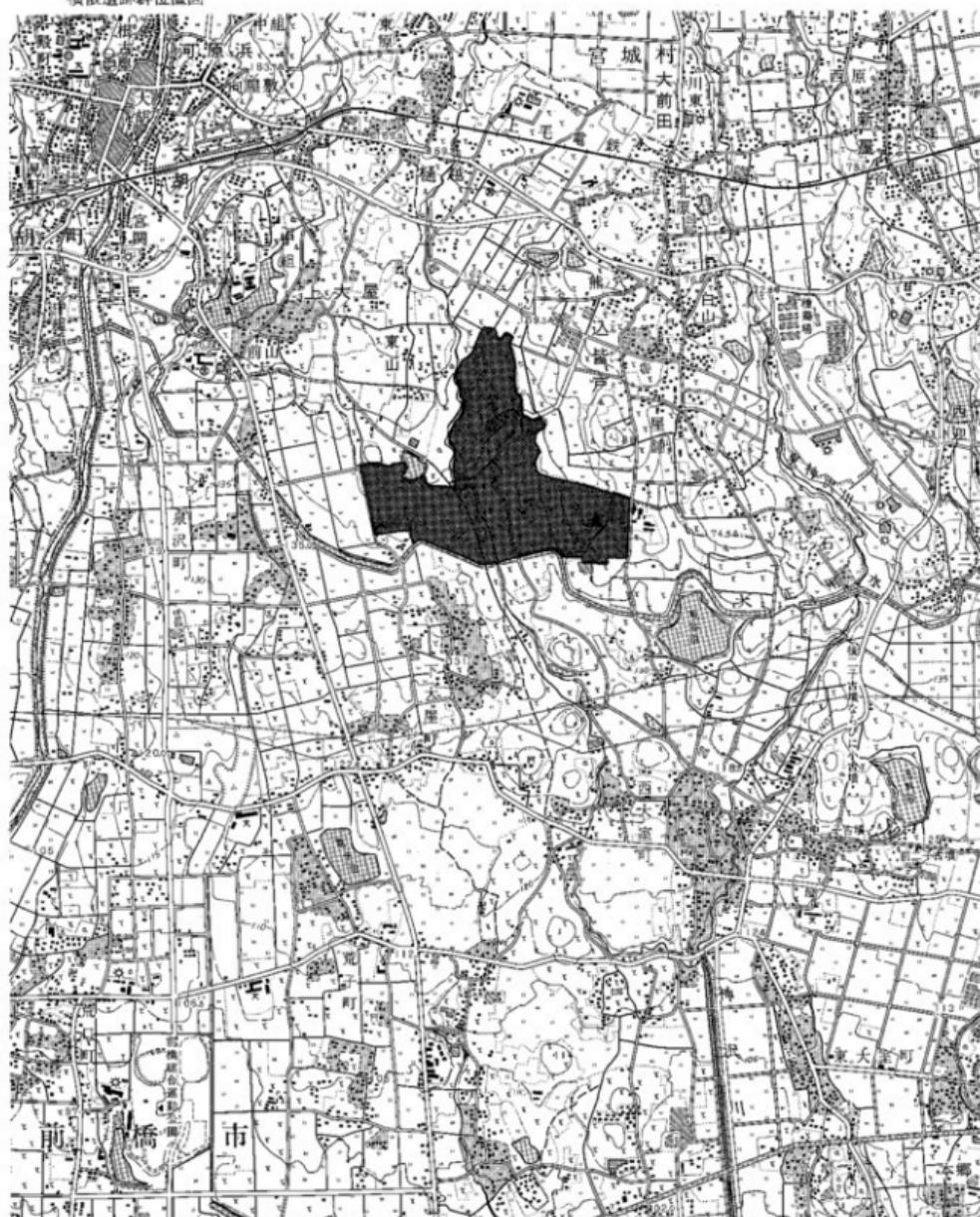
■ 大久保遺跡(1E21)

■ 大道遺跡(63・1E14)



Fig. 2 横俵遺跡群調査経過図

横須賀跡群位置図



1:25,000 大胡

500m 0 500 1000 1500

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の立地

横儀遺跡群は前橋市西大室町字熊の穴・上横儀・中横儀・大久保、下大室町字上諏訪山・大道に所在している。前橋市の市街地からは東へ約9kmの位置にあり、東西約1.2km、南北約1km、面積約55haという広大な範囲に及んでいる。遺跡群の周辺には、西方約500mに主要地方道伊勢崎・大胡線が南北に、北方約500mには主要地方道前橋・大間々・桐生線が東西に走っている。また、上毛電鉄樋越駅・北原駅へは約1kmの近距離にある。すなわち、北は大胡町、東は粕川村に接する、前橋市の北東端とも言える場所に立地している。

今年度の調査区のうち熊の穴II・上横儀遺跡は、こうした横儀遺跡群のなかでも北側にあたる丘陵部に位置し、群集墳の存在が古くから知られていた場所である。このうち昨年度までの調査で合計約50基の古墳及び周溝墓が確認されている。遺跡地の西側は急峻な崖であり、谷底を流量の少ない神沢川が南流している。北側から東側にかけては遺跡地を迂回するように細い谷底平野が南北に形成され、この谷底平野をはさんだ粕川村側にはなだらかな丘陵が南北に横たわっている。このような丘陵地形は赤城山南麓地帯に源をもつ荒庭川、神沢川、粕川等の流域で数多くみられ、これらの河川が南流することによって営まれたものがほとんどであるが、本遺跡地の独立丘陵はこれらのものとは異なり、主に赤城山の形成過程に由来するものである。

本遺跡群の所在する地域一帯は、今から、約20~30万年前におこった赤城山の山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれ(梨木泥流)によって形成された斜面を基盤としており、熊の穴II・上横儀遺跡が立地する小山のような地形は、その際に山体を構成していた地層が比較的まとまった形で運ばれてきたもので、周囲より高く突出している。この突出部は、とくに「流れ山」と呼ばれる、本遺跡地の基盤層と考えられるものである。このことは遺跡地の頂上部付近に露出している安山岩の巨石からも推察できるが、今回試掘調査を行った中横儀の一部のような平坦な低地及び熊の穴II遺跡の頂上部の2ヶ所の地層観察用の深堀により、実際に確認することができた。最低地ではAs-B・As-C等を含む黒土層の下に、As-YP・As-S P・As-B P・AT・暗色帶・Hr-H P等の関東ローム層が約3mも厚く堆積し、その下が岩盤になっていたが、頂上部では黒土層から暗色帶までわずか1m足らずで、その下は岩盤に覆われている。頂上部のローム層の堆積が最低地に比べ極端に少ないので、風や流水等によって低地方面に流されたためであろう。

なお、本遺跡地は戦後の昭和23年に新たな開墾が行われた土地が中心であり、特に今回の調査区は住宅下ということで、昨年度まで検出された遺構以上に残存状態は良好ではなかった。しかし、昭和の開墾から一昨年度の旧石器の検出まで、人々の残した痕跡を確認することができたとも考えられよう。

## II 遺跡の位置と環境

### 2 歴史的環境

横浜遺跡群がある赤城山南麓に位置する荒砥地区は、関東ローム層を基盤とする洪積台地を南下する河川・小支流が開拓し、地形的に原始古代から人々が生活を営む上での好適地である。そのため、遺跡が濃密に分布し、とくに古墳については県下でも最も密な分布がみられる地域の一つとなっている。近年では土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急激にかつ広範囲にわたって行われ、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡が今現在も爆発的に増え続けている。

一昨年度、本遺跡群でもナイフ形石器をはじめとする旧石器が発見されたが、周辺では柳久保遺跡群頭無遺跡(48e)で細石刃やナイフ形石器等を伴う3枚の文化層が、また尖頭器を中心に出土した三屋遺跡(15)、西原遺跡(86)、剝片を中心とした川篠皆戸遺跡(52)等があげられる。

縄文時代では、草創期から後期まで検出されている。中でも、上締引遺跡(82)、北山遺跡(83)、天神風呂遺跡(8)で検出された早期～中期の集落を筆頭に、谷津遺跡(12)、稻荷山遺跡(74)、荒砥上諏訪遺跡(69)等があげられる。後期は本遺跡群内の大道遺跡(1e)で配石遺構が発見された。

弥生時代は、荒口前原遺跡(41)で中期末の住居址が調査されている。また、乾谷沼、五料沼周辺では北山遺跡(83)、下締引遺跡(81)、久保皆戸遺跡(75)、西原遺跡(86)で後期の住居址が密集し検出されている。さらに、七ツ石遺跡(84)では、弥生時代終末期から古墳時代初頭への過渡期とみられる住居址が10数軒調査されているが、全般に大規模な集落は未だ検出されていない。

古墳時代になると、荒砥地区には国指定史跡となっている西大室の三二子古墳(77・78・79)をはじめ、数多くの古墳が築造されている。本遺跡群の東方に隣接する七ツ石古墳群(85)では、7世紀中葉ものとされる巨石巨室を持つ古墳が2基、西方約1.7kmには6世紀初頭の箱式棺状石室を持つ山ノ上・茂木両古墳(10)が、さらに南方には、阿久山古墳群(65)、伊勢山古墳群(66)、中島古墳群(67)等が連続的に位置している。また、本遺跡群内の熊の穴・上横須賀古墳群(1a・b)のような群集墳は、大稻荷・小稻荷遺跡(28・26)、水口山遺跡(27)、舞台遺跡(58)等でも発見されている。一方、集落は急激な増加がみられる。前期のものは内堀遺跡群(80)、荒砥宮田遺跡(38)、荒砥諏訪西遺跡(36)、荒砥東原遺跡(62)、大室小学校校庭遺跡(68)等で、中期は集落址のほかに荒砥荒子遺跡(56)、梅木遺跡(76)、丸山遺跡(17)で豪族居館址が発見されている。続く後期では北山遺跡(83)、天神風呂遺跡(8)、渋沢遺跡(89)、前田遺跡(90)等で集落址が検出されている。

奈良・平安時代に至ると、近隣した台地上に多数の集落が出現する。北山遺跡(83)、大久保遺跡(49)、西迎遺跡(88)等がそれらにあたる。また、柳久保水田址(48f)、荒砥諏訪西遺跡(36)、荒砥宮田遺跡(38)、荒砥前田遺跡(40)等のような、荒砥・宮川流域に位置する遺跡では、As-B軽石によって埋没した水田址が集落址とともに発見されている。これら以外の特殊遺構としては、古代勢多郡衙と推定される上西原遺跡(32)、その南に位置する荒子小学校校庭遺跡(51)からは須恵器窯址及び銅印が検出されている。また、上大屋・権越地区遺跡群(9)からは須恵器窯址、炭窯址、製鉄址遺構を含む八ガ峰生産址遺構が発見され本地域の発展の様子を窺うことができる。

2 歴史的環境



Fig. 4 横浜遺跡群周辺遺跡図

1. 横後遺跡群 (a. 熊の穴遺跡 b. 熊の穴遺跡 c. 大久保遺跡 d. 上横後遺跡 e. 大道遺跡)
2. 月田古墳群
3. 甲御訪遺跡
4. 柴崎古墳群
5. 殿町遺跡
6. 天神A・B・C地点遺跡
7. 犬越古墳
8. 天神風呂遺跡
9. 八ヶ峰生産址遺構
10. 山ノ上、茂木古墳
11. 山崎遺跡
12. 谷津遺跡
13. 寺東遺跡
14. 寺前遺跡
15. 三星遺跡
16. 荒砥355号墳
17. 丸山遺跡
18. 東前田北遺跡
19. 東原西遺跡
20. 新山遺跡
21. 東原西遺跡
22. 中山A・B遺跡
23. 村主遺跡
24. 山王遺跡
25. 大道遺跡
26. 小堀荷遺跡
27. 水口山遺跡
28. 大堀荷遺跡
29. 明神山遺跡
30. 御殿山古墳
31. 北原遺跡
32. 上西原遺跡
33. 東原古墳群
34. 東原遺跡
35. 宮下遺跡
36. 荒砥瀬訪西遺跡
37. 荒砥瀬訪西遺跡
38. 荒砥宮田遺跡
39. 権現山古墳
40. 荒砥前田遺跡
41. 荒口前原遺跡
42. 荒砥北原遺跡
43. 荒砥北三木堂遺跡
44. 荒砥大日原遺跡
45. 鶴谷遺跡群
46. 荒砥上之坊遺跡
47. 柳久保遺跡
48. 柳久保遺跡群 (a. 下鶴谷遺跡 b. 柳久保遺跡 c. 鶴谷遺跡 d. 中鶴谷遺跡 e. 頸無遺跡 f. 柳久保水田址)
49. 大久保遺跡
50. 頸無遺跡
51. 荒子小学校校庭遺跡
52. 川崎戸戸遺跡
53. 堀東遺跡
54. 荒砥下押切遺跡
55. 荒砥中里敷遺跡
56. 荒砥荒子遺跡
57. 元星敷遺跡
58. 舞台遺跡
59. 立野古墳群
60. 天神遺跡
61. 丸山古墳群
62. 荒砥東原遺跡
63. 富士山遺跡
64. 下境遺跡
65. 阿久山古墳群
66. 伊勢山古墳群
67. 中島古墳群
68. 大室小学校校庭遺跡
69. 荒砥上凱訪遺跡
70. 荒砥五反田遺跡
71. 荒砥上川久保遺跡
72. 荒砥上川久遺跡
73. 茶白山古墳
74. 稲荷山遺跡
75. 久保管戸遺跡
76. 梅木遺跡
77. 前二子古墳
78. 中二子古墳
79. 後二子古墳
80. 内堀遺跡群
81. 下綱引遺跡
82. 上綱引遺跡
83. 北山遺跡
84. 七ツ石遺跡
85. 七ツ古墳群
86. 西原遺跡
87. 三ケ尻遺跡
88. 西迎遺跡
89. 渋沢遺跡
90. 前田遺跡

### III 調査の経過

## III 調査の経過

### 1 調査方針

昭和63年度から始まった横儀遺跡群の発掘調査は、今年度で第5年次を迎えた。調査範囲があまりにも広大であったため、平成元・2年度は調査団および委託調査により並行して開発優先順位の高い場所から調査を実施してきた。3年度はそれらの遺跡の隣接地にあたる未調査部分のうち遺構・遺物の存在する可能性が高い地区をねらって調査を実施した。最終年度である今年度は遺跡群内に残っていた住宅下部分（面積約3,000m<sup>2</sup>）の調査が中心であったため、各住宅の移転、取り壊しを待つて調査を行わなければならなかった。さらに、住宅周辺の屋敷林や竹林については、開発除外地区として調査を実施できず、2つの古墳については周堀の一部を調査するにとどまった。

今回の調査区は大きく2ヵ所に分かれている。まず、2・3年度に調査を行った神沢川の東側の丘陵地である熊の穴II遺跡南東側の拡張部分と元年度から3年度まで直営及び委託により調査が実施された熊の穴II遺跡の南側にあたる上横儀遺跡の拡張部分、次に、熊の穴・上横儀遺跡の南側の低地に位置し、元年度に試掘調査を行った中横儀の一部である。そこで、各遺跡の名称は各々隣接する遺跡の呼称をそのまま踏襲し使用した。そのため、各遺跡の名称及び範囲については今後再検討する必要がある。また、調査は基本的には昨年度までの調査方針に準じて行った。すなわち、調査区の呼称方法については、元年度に本遺跡群全体をとらえたグリッドが設定してあったため、4mピッチで西から東へX1、X2、X3…と、北から南へY1、Y2、Y3…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。X100、Y100の公共座標は第一系+44.6、-58.6kmである。

今年度の調査区は調査済み地区の隣接地であるが、一部遺構の拡張部分を除き、掘削の著しい住宅下であることや周辺の遺構状況を鑑み、遺構・遺物の存在する可能性が低いと考えたため、幅1.3mのトレンチを基本的に8m間隔でハードローム上面まで入れ、遺構の有無を確認した。その結果、遺構が検出された地点の周辺については本調査を行い、古墳～平安時代のプラン確認を実施した。それと並行して公共座標に基づく植杭を、昨年度のグリッド杭を利用し必要に応じて4m方眼で行った。水準についても同様に、遺跡内に20m間隔、海拔高0.5m単位で設定し使用した。また、調査区の表土剥ぎおよび試掘調査は重機（バックフォー0.7m<sup>3</sup>）を用い、時間の節約に努めた。

図面作成は、平板・簡易置り方測量を用い、原則的に1/20の縮尺で、必要に応じて1/10・1/40の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録をとりながら収納した。また、プラン確認の段階で現況図を作成し、その後の調査に活用した。

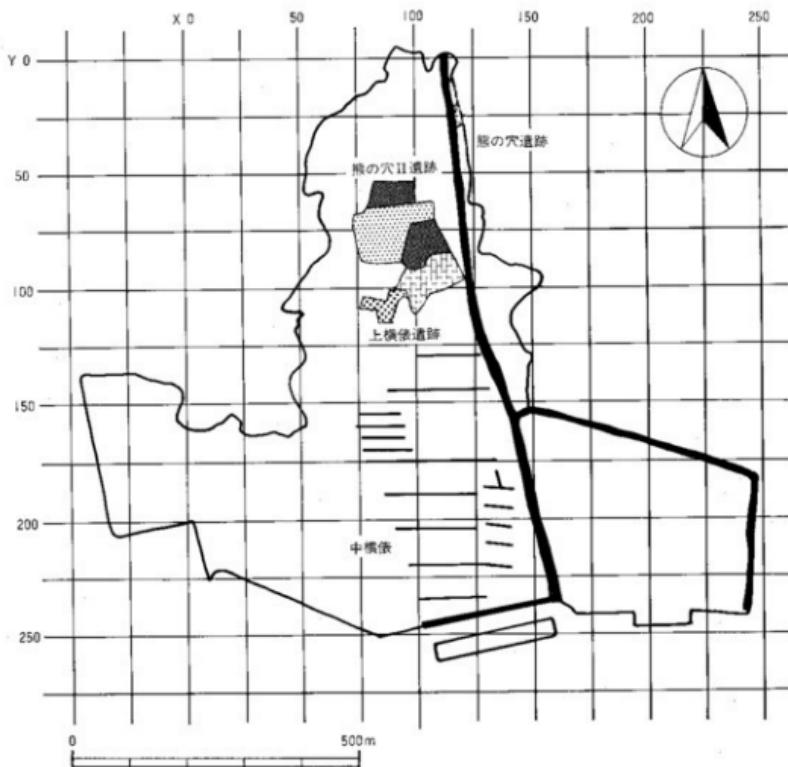


Fig. 5 グリッド設定図

### 試掘調査

#### 1. 熊の穴II遺跡

幅1.3mのトレンチをグリッドに合わせて、東西方向に基本的に12m間隔で5本、南北方向には1本設定し、必要に応じて細トレンチを入れて試掘調査を実施した。どれもハードローム層上面でプラン確認を行ったが、2本のトレンチからは古墳、住居址が確認されたものの、それ以外は、遺物・遺構とも検出されなかった。

#### 2. 中横塙遺跡

今年度調査区の周辺には平成元年度に30mピッチのトレンチがグリッドに沿って入れてあったが、今回さらに幅1.3mのトレンチを16m間隔で東西方向に5本、南北方向に1本設定し試掘調査を実施したが、遺物・遺構とも検出されなかった。

### III 調査の経過

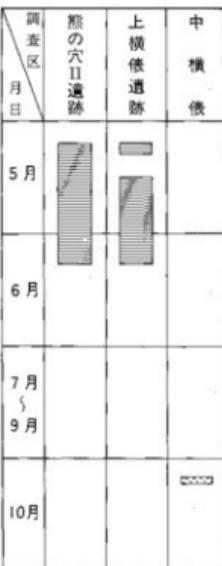
#### 2 調査経過

今年度の発掘調査は、調査区が住宅下部分であり、家屋の移転・取り壊しを待たなければ調査を開始できないという状況であったため、現場での調査は春・秋の2回に分けて実施した。よって、調査期間は熊の穴II・上横儀遺跡の拡張部分が平成4年5月6日から6月8日までの約1ヶ月間、中横儀の試掘調査は10月5日から10月7日までの3日間となった。

4月中に前橋工業団地造成組合との事前協議、事務手続き等を済ませ、委託契約締結日である5月6日に、テントを設営し調査を開始した。まず、昨年度の調査で確認したもの家畜飼育小屋の下に前部が存在していると予想された熊の穴II遺跡M-11号墳の未調査部分周辺、翌日には同じく住宅の庭部分に周堀の一部が入り込んでいるものと予想された上横儀遺跡M-2号墳の拡張部分の表土剥ぎから行った。続く8日からは熊の穴II遺跡拡張部分の試掘調査を開始、さっそく2基の古墳を確認したため周辺については本調査に移行した。この間にも試掘調査は南へ向かって行っていたが、試掘を終えようという14日にはトレンチの断面から住居址を検出、H-2と命名した。翌日から周辺の表土剥ぎを開始した結果、もう1軒の住居址と近代のものと思われる炭窯址1基を検出した。当初はまったく予想もしていなかった遺構の出現に、さらに現道の西側についても全面調査に切り替えた結果、19・20日と立て続けに住居址1軒と古墳1基が検出された。その後、6月2日にハイライダーによる全景写真撮影を実施、その後、精查及び測量を行い、6月3日には発掘資材を搬出した。

中横儀の試掘調査を実施できたのは10月5日のことであった。調査区内に2軒の住宅が残っており、調査の方法について検討を要したが、平成元年度に行った周辺地区の試掘調査で遺構の検出がみられなかつたという結果に基づき、調査可能な地点を選んで、できるだけ試掘調査の成果が上がる方法で実施せざるをえなかつた。そのため、今回調査区については幅1.3mのトレンチを約20m間隔で任意に設定し調査を実施した。その結果、周辺地区と同様に遺構の検出はなく、遺物すらほんの数点が出土したに過ぎなかつた。このため、調査は3日間といふ短期間で終了した。

5年次にわたる横儀遺跡群の調査も今年度をもってすべて終了した。すでに部分的ではあるが開発が進み、周囲の景色も以前に比べはるかに近代的なものに一変した。この地では約22,000年前の旧石器の検出から数十年前である昭和の開墾までといふ人々の残した歴史を確認することができた。こうした時代の流れを感じられる一連の調査だったと実感するものである。



■ 試掘調査 ■ 発掘調査

Fig. 6 発掘調査経過図

## IV 層序

本遺跡群は、赤城火山の山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれ（梨木泥流）によって形成された斜面を基盤としている丘陵地、及びその南側に広がる平坦な低地によって構成されている。基盤層の上は諸火山によって噴出された火山灰が風化し、形成されたローム層が覆っているが、それらは低地部を中心に吹きだまるかたちで堆積していったため、地形の変化の著しい本遺跡の層序は各地点により堆積状況に違いはあるものの、基本的にはFig. 7 の通りである。

- I 層 黒褐色粗砂層。粘性をわずかに有し、軟らかいが締まる。As-Cを20~30%含む。
- II 層 黄褐色粗砂層。粘性を有し、軟らかいが締まる。ローム土が50%以上含まれる。
- III 層 黄褐色軟質（ソフト）ローム層。粘性を有し、軟らかいが締まっている。均一な層であり、縄文時代遺物包含層となっている。また、古墳時代の遺構がこの層で確認できる。
- II a 層 黄褐色軟質（ソフト）ローム層。粘性を有し、軟らかいが締まる。この層からも縄文時代の遺物が出土するが、数は極端に減少する。また、縄文時代の一部の遺構もこの層から確認できる。
- IV 層 黄褐色硬質（ハード）ローム層。上部にAs-Y Pがブロック状に入る。粘性・締まりとともに有り。縄文時代遺構確認面。
- V 層 黄褐色硬質（ハード）ローム層。As-S Pを霜降り状に含む。粘性・締まりとともに有り。
- VI 層 黄褐色硬質（ハード）ローム層。As-B Pが入り、下部に純層をブロックで含む。
- VII 層 黄褐色硬質（ハード）ローム層。As-B Pをわずかに含む。
- VIII 層 明黄褐色微砂層。粘性を有し、締まりは弱い。広域テフラATが入る。平成2年度の調査では旧石器がこの直下で検出された。
- IX 層 暗褐色ローム層。暗色帶。粘性・締まり強い。
- X 層 明黄褐色硬質（ハード）ローム層。粘性・締まりともに強い。
- XI 層 明黄褐色硬質（ハード）ローム層。粘性・締まりともに強い。
- XII 層 明黄褐色軽石層。Hr-H P。
- XIII 層 褐色粘土層。粘性・締まりともに非常に強い。

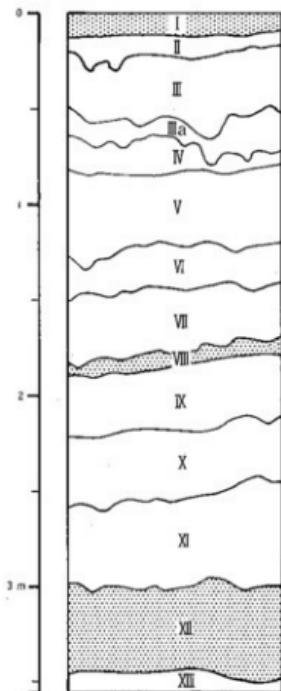


Fig. 7 熊の穴II遺跡標準土層図

## V 古墳時代の遺構と遺物

今年度の調査の主体となった熊の穴・上横俵遺跡は、古墳時代終末期の群集墳の存在が以前から認められており、昨年度までの調査でその全貌がほぼ明確になった。とくに熊の穴II遺跡では丘陵の斜面に大きさは大小様々ではあるが、同様の形状及び構築方法の円墳13基が確認されている。それぞれの古墳は丘陵の南側の斜面にどれも主体部をほぼ南に開けて構築されていたが、昭和23年に行われた開墾や近年の耕作等により、どれも盛土を削平されており、主体部についても破壊されていたもののが多かった。

昨年度までに調査された古墳のうち、熊の穴II遺跡M-11号墳と上横俵遺跡M-2号墳は、それぞれその一部が既存の建物の下や住宅の庭に入っていたため、住宅の移転を待って今年度残りの部分の調査を実施したものである。また、新たに確認された古墳は両遺跡で計5基であるが、2基(M-17・18)については開発除外区域であるため、一部を調査するにとどまった。

今回の調査区は昨年度まで住宅であった部分であるため、各古墳の残存状態は今まで検出されたものより悪く、中には前底部を残すのみのものもあった。そのような中でM-16号墳の石室からは長さ約80cmの直刀が出土し、熊の穴古墳群の唯一貴重な副葬品の検出となった。

熊の穴II遺跡において確認された古墳の主体部については、どれも安山岩の河原石あるいは山石を自然石の状態で使用し構築されており、その使用石材及び古墳の様相からみると、所産時期は7世紀後半代のものと考えられる。また、上横俵遺跡については約30基の古墳及び周溝墓が確認されているが、調査団直営で実施したものはそのうちの4基のみであり、残りは委託調査で行ったものである(「横俵遺跡群IV」を参照)。ただし、各々の遺跡の範囲は便宜的に使用してきたものであるため、今後の検討を必要とするものである。

## 1 古 墳

## 熊の穴II遺跡

M-11号墳 [総覧荒砥村第98号墳：西大室町熊の穴17・上横俵57番地] (Fig. 13, P.L. 3)

位 置 X93~97、Y73~83グリッド 標 高 158.6m

墳 丘 高さ1.35m。墳丘長東西10.84m、南北10.20m。総長東西14.81m、南北(17.70m)。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に3.52mを、深さは0.51mを測る。

主体部 形態は掘り方を有する両袖型横穴式石室で、安山岩の自然石による乱石積。主軸方位はS-12°-E。主軸長は4.04m。玄室は長さ2.50m、幅1.54m、羨道長1.54m、羨道幅0.80m。

遺 物 今年度の前庭部の調査で土師杯(15)が検出された。また、昨年度、復元できたものには周縁から検出された須恵高台碗がある。

備 考 今年度は前庭部のみ調査。詳細は「横俵遺跡群V」を参照

M-15号墳 [綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57-1番地] (P L. 2)

位 置 X106、Y89・90グリッド 標 高 152.8m

墳 丘 削平されており、規模不明。

前 庭 規模は南北3.67m、東西3.64m。深さは0.69mを測る。

主体部 破壊されており、規模・形状とも不明。

M-16号墳 [綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57-1番地] (Fig. 11・14・15、P L. 1・2)

位 置 X107～109、Y86～88グリッド 標 高 152.8m

墳 丘 削平されており規模不明。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に4.20mを、深さは1.12mを測る。

主体部 主軸方位はS-17°-E。主軸長2.62m、玄室長1.54m、玄室幅0.75m、羨道長1.08m、羨道幅0.48mで、形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

遺 物 玄室内から鉄刀(16) 1振りが出土した。

M-17号墳 [綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57-4番地] (P L. 3)

位 置 X108～111、Y88～90グリッド

墳 丘 調査区外に位置しているため規模不明。

前 庭 一部のみ調査。擾乱が入っているが、深さは0.37mを測る。

主体部 調査区外のため規模・形状とも不明。

M-18号墳 [綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57-3番地] (P L. 3)

位 置 X111、Y85・86グリッド

備 考 周堀の一部のみ調査。墳丘、前庭、主体部とも調査区外のため規模・形状とも不明。

#### 上横俵遺跡

M-2号墳 [綜覧荒砥村第100号墳：西大室町上横俵62番地] (Fig. 12、P L. 4)

位 置 X90～95、Y104～109グリッド 標 高 148.8m

墳 丘 高さ2.60m。墳丘長東西12.50m、南北11.40m。総長東西19.50m、南北19.20m。

前 庭 規模は羨門部と思われる部分から主体部主軸方向南側に長さ(2.46)mを、深さは0.60mを測る。北西側は擾乱を受けている。

主体部 主軸方位はS-1°-W。主軸長(4.58)m。開墾によるものと思われる破壊が著しく、奥壁および西側の一部のみを確認。形態は横穴式両袖型割石乱石積と思われる。

備 考 今年度は北側の周堀の一部のみ調査。詳細は「横俵遺跡群V」を参照

M-4号墳 [綜覧記載漏れ：西大室町上横俵61番地] (Fig. 11・16・17、P L. 4)

位 置 X92～94、Y100～102グリッド 標 高 150.7m

墳 丘 削平されており認められなかつた。周堀は北西側のみわずかに残る。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に3.90mを、深さは0.92mを測る。

## VI 奈良・平安時代の遺構と遺物

**主体部** 主軸方位は S - 9° - E。主軸長2.75m、玄室長1.65m、玄室幅1.06m、羨道長1.10m、羨道幅0.72m。形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

## VI 奈良・平安時代の遺構と遺物

横須賀遺跡群内の本時代の遺構の検出例は、遺跡群の北側に位置する熊の穴・熊の穴II遺跡で、古墳時代の集落にまじって、数軒の住居址および丘陵の斜面上に2基の炭窯が検出されている。また、南東端に位置する大久保遺跡で2軒の住居址が確認されている程度で、検出例は他の時代に比べるかに少ない。この理由としては、丘陵部分がほとんど古墳群によって占地されているため、住居址をはじめとする他の遺構が存在する可能性は極めて低いと考えてきた。

しかし、今年度の調査ではこの古墳群の比較的近距離の場所に3軒の住居址を確認した。どれも東壁に竈を持つもので、所産時期はその出土遺物から奈良・平安期のものであると思われる。

### 1 住居址

#### H-2号住居址 (Fig. 18, PL. 5・6)

位置 X104・105、Y95・96グリッド

形状 長方形

規模 長軸4.24m、短軸(2.80)m。確認面からの壁高は64cmを測り、壁は垂直に近い角度でハードローム層まで掘り込まれている。トレンチにより南壁の一部が欠損する。

面積 9.54m<sup>2</sup> 方位 N-70°-E

床面 ハードローム層中につくられる。南に向かって下っておりレベル差は約10cm。

#### H-3号住居址 (Fig. 19, PL. 6・7)

位置 X102・103、Y96・97グリッド

形状 長方形

規模 長軸4.86m、短軸3.68m。確認面からの壁高は65cmを測り、壁は垂直に近い角度でハードローム層まで掘り込まれている。

面積 14.00m<sup>2</sup> 方位 N-9°-W

床面 ハードローム層中につくられる。南

竈址 東壁中央南寄りに位置する。主軸方位はN-80°-Eで全長131cm、幅82cmを測る。構築材は粘土を主体に使用。粗粒安山岩の右袖石らしきものも検出した。

貯蔵穴 竈の南側、南東隅にP<sub>1</sub>：径32cm、深さ40cmの円形のものが、また北西隅にP<sub>2</sub>：長径56cm、短径48cm、深さ13cmの梢円形のものが検出された。

遺物 図示したものは須恵皿(1)、須恵杯(2・3)、土師甕(5)の計4点である。

に向かって下っておりレベル差は約10cm。

竈址 東壁中央南寄りに位置する。主軸方位はN-86°-Eで全長127cm、幅96cmを測る。構築材は粘土を主体に使用しており、粗粒安山岩の支柱石を検出した。

貯蔵穴 竈の南側、南東隅にP<sub>1</sub>：長径48cm、短径39cm、深さ31cmの梢円形のものが、また北西隅にH-2と同様にP<sub>2</sub>：長径63cm、短径

## 1 炭窯址

48cm、深さ16cmの梢円形のものを検出。

須恵杯(7)、須恵楕(8)各1点づつである。

遺物 図示したものは須恵皿(5)、土師杯(6)、

H-4号住居址 (Fig. 20, P L. 8・9)

位置 X98・99、Y100~102グリッド

形状 長方形

規模 長軸6.08m、短軸3.28m。確認面からの壁高は73cmを測り、壁は垂直に近い角度でハードローム層まで掘り込まれている。

特に極端な長方形を呈している。

面積 15.60m<sup>2</sup> 方位 N-17°-W

床面 ハードローム層中につくられる。南に向かって下っておりレベル差は約10cm。

竈址 2個検出された。東壁中央南寄りに

F<sub>1</sub>: 主軸方位N-85°-E、全長133cm、幅84cmのもの、東壁中央に F<sub>2</sub>: 主軸方位N-72°-E、全長53cm、幅58cmのものであるが、F<sub>2</sub>については竈かどうか定かではない。構築材は粘土を主体に使用。F<sub>1</sub>は袖石を使用していたものらしい粗粒安山岩を検出。

貯蔵穴 南東隅に P<sub>1</sub>: 長径56cm、短径47cm、深さ29cmの梢円形のものが検出された。

遺物 図示したものは土師皿(9)、土師杯(10)、土師甕(13)、須恵楕(10・12・14)の計6点である。

## VII その他の時代の遺構と遺物

今回の調査では熊の穴II遺跡から炭窯址1基が検出された。本遺跡では平安時代の炭窯址がすでに2基検出されているため、今回確認したものはK-3号炭窯址と呼んだ。昨年度、上横岳遺跡から検出されたものと同様の形態をしており、焼土および覆土の状態が最近のものらしいという点からも、おそらく明治時代以降に使用したものと考えられる。また、奥壁の一部は旧松井宅で使用していた井戸により破壊されており、調査できなかった。

## 1 炭窯址

K-3号炭窯 (Fig. 21, P L. 9)

位置 X104~106、Y99~101グリッド

形状 南東へ下る緩やかな斜面を利用して構築されていた。全長(5.76)m、幅2.72mの不整形を呈し、残存壁高96cmを測る。壁面は非常によく焼けており、焼土、灰が多量に検出された。旧松井宅で使用していた井戸により奥壁の一部を破壊されていた。

備考 形状および焼土・覆土の状態から明治時代以降に使用していたものと思われる。

## VIII 成 果 と 問 題 点

### 1 横俵遺跡群の概要について

昭和63年度から行われてきた横俵遺跡群の発掘調査は、今年度をもってすべて終了した。開発面積が広大であったため、熊の穴・熊の穴II・上横俵・大久保・大道の5遺跡に大きく分けて調査を実施し、調査主体も3パーティによって行ってきたため、各々の調査の成果をまとめ、本遺跡群の全容をとらえる必要があるが、現在、整理中のものもあるため、遺跡群全体の詳細な整理、検証をすることは現段階ではできなかった。さらに、各遺跡の名称についても再検討を要し、とくに熊の穴II遺跡という名称は、熊の穴遺跡の2年次からの調査団直営の調査区に便宜的に使用したものである。4カ年にわたる同遺跡の調査の結果、2つの遺跡の性格や立地条件などを踏まえると、ひとつの遺跡として考えることができる。いくつかの詳細な検討はすべての整理の終了を待つことにして、ここでは、遺跡群の概要を時代ごとに記してみたい。

#### 旧石器時代

平成2年度の調査で熊の穴II遺跡から、丘陵の頂上付近からAT前後のものと思われる旧石器が合計128点出土した。本遺跡周辺は丘陵状の地形が広がり、これは中期更新世に発生した赤城火山の山体崩壊に由来する梨木岩屑なだれ堆積物（守谷、1968、早田、1990）から構成されている。このうち遺跡の西側に小山のように突出している地形は「流れ山」と呼ばれるもので、岩屑なだれの堆積地形として特徴的なものである。岩屑なだれでは、火山体を構成していた地層が滑りながら移動するため、地層は崩壊時に破碎された形態を保ったまま移動し十分にこなされない。そして、地層ブロックは破碎された碎屑物からなる平坦面上に突出し、この形成された突出部が、「流れ山」と呼ばれているのである（早田、1991）。本遺跡内のこの「流れ山」と呼ばれる丘陵は、本遺跡群の中でも最も標高が高く（最頂部165m）、周囲からみると10m以上突出している。丘陵の西側および北側は急峻な崖となっており、赤城山に源を持つ神沢川が南流する。この丘陵の頂上付近で旧石器が検出されたのである。このような地点での旧石器の検出は、周辺地域では特異なものであったほか、出土石器のうちナイフ形石器の占める割合が、県内の他遺跡と比較してもかなり高かったことなど、赤城南麓の旧石器の研究に新たな事例を加えることができた。

#### 縄文時代

縄文時代では特筆できるものに、大道遺跡から検出された後期の集落をあげることができる。大道遺跡は本遺跡群の中でも最も西側に位置し、後期更新世前半に形成された赤城山南麓の扇状地上に立地している。比較的平坦な地形を呈しているが、神沢川の右岸台地上に存在していることから、幾度かの河川の氾濫により地表面の土壌は複雑である。本遺跡では後期称名寺2～安行

1式期の土器を伴う住居址26軒が検出されたほか、住居址に取り囲まれるかのように配石遺構25基が確認された。配石は円形、石棺型に分類でき、敷石状のものもみられた。敷石状のものは配石群からはずれて存在しており、祭祀的な性格を持つものとも思われる。また、南側に隣接する県教委で調査を実施した大道遺跡からも、同時期の住居址および遺物包含層が検出されており、縄文後期における周辺地域の繁栄が窺われる。

大道遺跡が後期の集落であるのに対し、北側の丘陵地に位置する熊の穴・熊の穴II遺跡では主に前期の遺構が検出された。まず、前期後半諸磯式期の土器を伴う住居址が丘陵の東斜面の縁辺部から6軒、丘陵の南斜面上に2軒、さらに、いわゆる「陥し穴」と思われるもの15基を含む土坑85基などが確認されている。また、丘陵の斜面上を中心に草創期から後期までの遺物包含層が、層位とは無関係に断続的に展開しており、そのうち主体となる土器は前期後半諸磯期のものであった。これらのことから、本遺跡は縄文前期に最も繁栄したと考えることができる。包含層の遺物出土状況をみると、草創期から前期のものは丘陵の頂上に比較的近い地点からの出土が中心であるのに比べ、中期以降とくに後期のものは、少量ではあるが縁辺部に移行していく傾向をみせる。後期の集落が平坦な低地である大道遺跡から検出されたことでもあわせて、縄文時代における生活域の変化を示すひとつの資料ともいえよう。また、少ない遺構量に比べ大量の遺物が出土していることは、熊の穴遺跡の特徴のひとつとなつたが、遺物集中区においては平地式住居の存在も十分予想できるであろう。赤城山南麓の近隣地区における縄文前期の資料をみると、いずれも前期の遺跡は丘陵状の地形に立地しており、本遺跡についても符号する事例となった。

### 古墳時代

丘陵地である上横浜、熊の穴遺跡では、終末期の古墳群である上横浜古墳群の存在が以前から認められており、昭和10(1935)年調査の『上毛古墳綜覧』にも17基が記載されている。上横浜古墳群は「流れ山」と呼ばれる丘陵の斜面上に展開されているが、この丘陵は2つの頂上を有し、頂上間にはわずかに深い谷が入っている。つまり、それぞれ独立した丘陵のようにもみえるのである。さらに、今回の調査の結果、この谷を境にして古墳群の性格が異なっていることが明らかになったため、古墳群をそれぞれ支群として2つに分け、北側の丘陵に存在するものを熊の穴古墳群、南側の丘陵に存在するものを上横浜古墳群と呼ぶこととした。

熊の穴古墳群では合計17基の小円墳が、丘陵の南～南東側の斜面上および縁辺部に構築されており、今年度の調査で当時完全な墓域として展開していた本古墳群の全貌を明確にすることができた。ただ、開発除外区域内にも数基の存在が予想されることから、本古墳群は約20基で構成されていたと考えられる。本古墳群の古墳はすべて横穴式石室を主体部とし、前部に深い掘り込みをもつ山寄せ形態をとっている。これは、赤城山南麓の周辺市町村でも多くみられるものである。また、本古墳群では埴輪は出土しなかったため、いずれの古墳にも埴輪の樹立はなされなかったものと思われ、これらのことから本古墳群は埴輪消滅後の7世紀中葉以降のものと考えられ

## VIII 成果と問題点

る。今回の調査では石室内の副葬品としては、鉄刀2振りが出土したに過ぎず、各古墳の検出状態から考へるとかなりの破壊、盗掘が行われていたと思われる。そこで、各古墳の新旧関係については周堀の形状から考へてみたい。周堀の形状には、a ほぼ全周するもの、b一部掘られていても、c 「前庭状」の掘り込みのみもつものの3つに分類でき、aタイプのものはさらに周堀の形状が、a<sub>1</sub>比較的整っているもの、a<sub>2</sub>周囲の状況の規制を受け変形しているものに分けられる。この観点から各古墳の立地と形状を検討すると次のようになる。

a <sub>1</sub>	M-12	M-13	M-14	M-10	M-11	M-7	M-4
a <sub>2</sub>	M-6						
b	M-8	M-1	M-2	M-5			
c	M-3						

この中で新旧関係が明らかに判明するものは、M-7号墳→M-6号墳→M-8号墳の関係のみである。本遺跡群の南方に位置する荒砥二之塚遺跡における21基の古墳の調査結果から、徳江秀夫氏はa→b→cのような周堀の形態変遷について、一定の区域内に古墳を築造しなければならないような規制と、土工量を少なくて古墳の築造に必要とする労力を削減してゆく方向が一致し、墓域として主体部の周囲を画していた周堀が、低い墳丘を構築するための封土確保のための掘削坑へ変化していったとも推定できるとしている。この見解は本古墳群の形成過程についても合致するものである。さらに、a<sub>1</sub>タイプのものは丘陵の裾部分に構築されている傾向がみられる。このことから本古墳群の形成は南側から進められていったと考えられ、上横俵古墳群との前後関係を示唆するものとも推定できる。

熊の穴古墳群の南側に展開する上横俵古墳群の各古墳の様相は、また違ったものをみせる。26基の古墳が確認されたが、この中には熊の穴古墳群ではみられなかった比較的大型の円墳および6基の方形周溝墓が存在している。これは古墳群の形成当初に一部方形周溝墓が造られていたことも考えられ、方形周溝墓から古墳への発展過程を推測できる。位置的にみると方形周溝墓は頂上近くの斜面上に位置し、大型のものは南側の緩やかな斜面の縁辺部に集中する傾向をみせる。大型の古墳のなかには、鉄刀2振り、耳飾り5点および、玉類などの副葬品と思われるものが石室から出土しているものもある。また、本古墳群では埴輪が数多く検出されていることから、その成立は熊の穴古墳群よりも古い6世紀代と考えられる。

この2つの古墳群のように、比較的小規模のものではあるが、墳丘を造営し立派な横穴式石室を構築して埋葬された人々は、やはりそれなりの社会的・政治的身分を有した階層の人々だったのであろう。さらに、熊の穴古墳群のように石室も小さくなってきたものは、被葬者は一人だけだったのであれば、特定の階層の人々の中でもとくに有力な人物だけが、小古墳を造ることを許されたのであろう。なかでも、昨年度検出された玄室長55cm、幅42cmと極端に狭い埋葬施設をもつ古墳は、乳幼児の埋葬施設とも考えられるが、被葬されるにふさわしい階層の血縁者であったのであろう。古墳群の様相についても、各古墳の重複関係がみられる上横俵古墳群と違い、熊の穴

## 1 横俵遺跡群の概要について

古墳群では各古墳がほぼ独立して存在している。このことからも6世紀代よりさらに限られた人物のみが、古墳に埋葬されたと考えられるのである。また、時代的にみると上横俵古墳群から古墳が形成されていき、構築場所の不足から、さらに北側である末闇の裏山に熊の穴古墳群の造営が開始された可能性が高い。2つの古墳群を造営していった人々に関連があるとすれば、当然その居住域は古墳群よりも南方の平地であったと思われる。

古墳時代の集落は、熊の穴遺跡および大道遺跡で検出されている。熊の穴遺跡では古墳群が展開する丘陵の北東方向の縁辺部において、前期赤井戸式土器を伴う住居址が38軒調査されている。遺跡地の東側に広がる谷底平野に近い地点で井戸1基が検出されたほか、集落のほぼ中央部に大型の住居が存在していた。この集落に関係する墓域は周辺では確認されていない。また、大道遺跡では前期の住居址47軒と後期の住居址33軒が調査されている。それぞれの立地をみると、遺跡地の東寄りに前期のもの、西寄りに後期のものが集中する傾向をみせている。北東に位置する熊の穴遺跡の前期の集落の存在もあわせ、本遺跡群全体の古墳時代の人々の流れと一致しているようにも思われる。周辺遺跡の成果との再検討を要するものである。また、後期のものは鬼高式期の遺物を伴うものであり、上横俵古墳群の形成と同時期のものと考えられる。大道遺跡の居住者は、当時も流れていたと思われる神沢川を渡り、上横俵の丘陵に古墳を造営していったのである。また、それぞれの集落に付随する生産域は今回の調査では確認することはできなかった。

### 奈良・平安時代

古墳時代における集落の発展に比べ、本時代の遺構数は激減する。大道遺跡1軒、上横俵遺跡2軒、熊の穴遺跡7軒、丘陵の西斜面である大久保遺跡で2軒の住居址を検出したのみである。ここで注目したいのは、それぞれ検出された住居址が多くても3軒の集まりで存在していることである。とくに、熊の穴遺跡では古墳群からわずか10m程の至近距離に住居址が検出された。これらがいわゆる「離れ団扇」かどうかは言及をさけるが、何らかの意味を持つものと思われる。

炭窯址は覆土の最上部から1108年(天仁元年)に降下したAs-B(浅間B鉄石)の純層が認められた。木炭の用途は鉄を溶かし、引き延ばす際の火力として用いられていたものであろう。近隣町村でも検出されており、熊の穴付近でも活発な鉄生産が行われた事実の裏付けと考えられる。

Tab. 1 横俵遺跡群報告書一覧

遺跡群名	遺 跡 名	略称	調査年度	掲載報告書名	備 考
よこだわらせいきぐん 横俵遺跡群	おおの 道 遺 跡	E14	昭和63～平成元年度	横俵遺跡群 II	繩文～中世
	かみよこだわら いせき 上横俵遺跡	E18	平成元～平成4年度	横俵遺跡群 IV・V・VI(本報告)	繩文～近代
	くま あな いせき 熊の穴 遺 跡	E19	平成元～平成3年度	横俵遺跡群 I・IV・V	繩文～平安
	おおの くわい いせき 大久保 遺 跡	E21	平成元年度	横俵遺跡群 I	奈良・平安
	くま ぬか いせき 熊の穴 II 遺 跡	E24	平成2～平成4年度	横俵遺跡群 III・V・VI(本報告)	旧石器～近代

## VIII 成果と問題点

### 2 赤城山南麓の流れ山と古墳群について

今回確認された上横俵(2)・熊の穴古墳群(1)は、丘陵の斜面にいわゆる「山寄せ」の形態を呈して展開している。この丘陵状地形は赤城火山の山体崩壊に起因する「流れ山」と呼ばれる堆積地形であり、赤城南麓においては主に標高160m以下のなだらかな裾野上に突出する形で点在している。この周辺では遺跡が存在し、中でもその斜面上には本古墳群とほぼ同期のものと考えられる円墳を中心に関連する古墳群が数多く確認されている。

前橋市においてこの「流れ山」は、主に本遺跡群内を南流する神沢川に沿って存在している。このうち本遺跡群のものは最も北に位置し、上横俵・熊の穴古墳群で合計約50基の古墳が存在していたと思われる。また、南へ下った伊勢山古墳群(3)で16基、阿久山古墳群(4)で16基、下境I遺跡(5)で22基などの古墳群が集中して存在している。さらに南方には、40基からなる天神遺跡(6)がある。また、国指定遺跡の大室の三二子の北に位置する内堀遺跡群(7)では、約100軒からなる集落

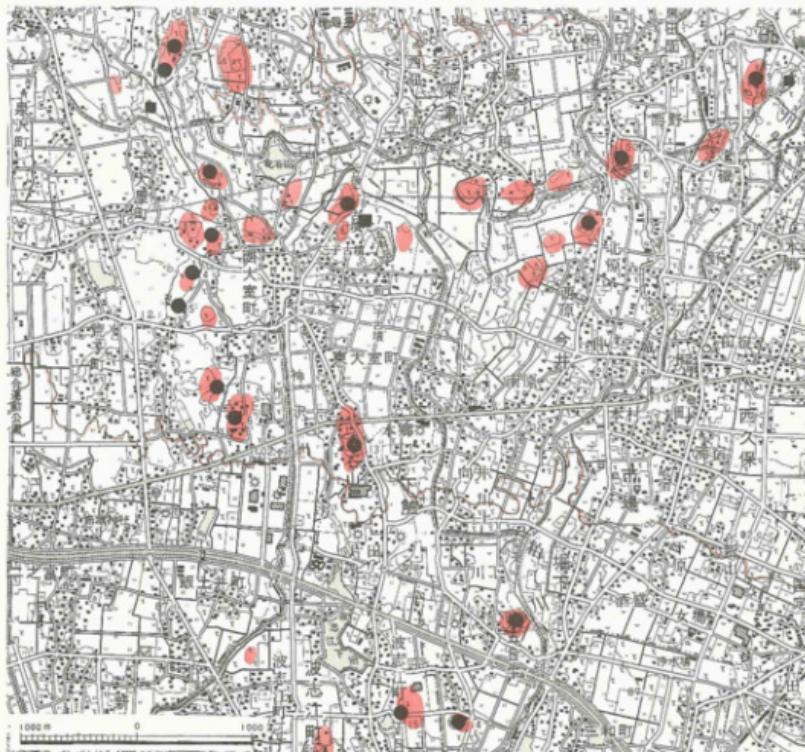


Fig. 8 赤城山南麓の流れ山と周辺の古墳群

## 2 赤堀山南麓の流れ山と古墳群について

が検出され、その北西の丘陵上にあたる上綱引遺跡(8)に墓域が認められている。

赤堀町でも同様なものがいくつかあるが、代表的なものは峯岸山古墳群(9)である。本古墳群は隣接する新里村のものと同一とすれば約60基の大古墳群となり、すぐ東側の新里村十二社遺跡(10)から、古墳時代前期を中心とする住居址が約400軒検出され、古墳群に伴う大集落と考えられる。また、周辺では神社丘古墳群(11)、吉沢峯・轟山古墳群(12)などが存在している。さらに、標高が少し低い南方では、前方後円墳2基、円墳69基を確認した石山片田古墳群(13)、55基で構成される地蔵山古墳群(14)、約70基からなる伊勢崎市蟹沼東古墳群(15)などが存在している。

このように、いずれの古墳群についても同一の丘陵に古墳が大挙して築造されるのは、周辺の地理的・地形的要因によるものと思われる。つまり、労力の削減を追求するこの「山寄せ」という構築手法を用いる古墳の造営は、丘陵の斜面という格好の場所を得る必要がある。そこで、赤城南麓の末端部分、いわば関東平野の最北部分にあたる本地域では、このような丘陵状地形を求めるには、この「流れ山」は絶好の場所であったともいえる。とくに標高100m以下の地点においては、蟹沼東古墳群や地蔵山古墳群のように50基をこえる古墳が、場所せましと造営されているものが検出されている。また、いずれの古墳群も居住域から古墳群である墓域への移行はみられても、その後居住域になることはほとんどない。その原因については自然環境の変化、計画的な移動、土地利用の制約、さらに強力な祭祀的な意味合いなどを想起できるが、このような土地利用の変遷は簡単には解決できない問題である。

## 参考文献

- 群馬県 1988 「群馬県史 資料編1 原始古代1 旧石器・縄文」 群馬県史編さん室  
前橋市 1971 「前橋市史 第1卷」 前橋市史編さん委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 「荒紙二之塚遺跡」  
群馬県教育委員会 1990 「舞台・西大室丸山」  
柏川村教育委員会 1982 「月田古墳群B1 昭和55年・56年度発掘調査の概要」  
柏川村教育委員会 1985 「西原古墳群K5」  
柏川村教育委員会 1989 「白藤古墳群」  
柏川村教育委員会 1985 「柏川村遺跡」  
赤堀村教育委員会 1975・1976 「赤堀村峯岸山の古墳 1・2」  
赤堀村教育委員会 1977・1978 「赤堀村地蔵山の古墳 1・2」  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「柳久保遺跡群IV」  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991 「内堀遺跡群IV」  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990 「横俵遺跡群I」  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991 「横俵遺跡群II」  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992 「横俵遺跡群V」

## Ⅳ 成果と問題点

Tab. 2 繩文式土器観察表

番号	出土位置	①胎 土 ②焼成 ③色 調 ④既存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
1	X 105 Y 96	①細粒②良好③にぼい縁④胸部	無地の縄文L。	黒浜
2	X 95 Y 84	①中粒(高音母)②良好③縁④胸部	沈縞・縄文L R。	加賀利E 3
3	X 95 Y 84	①中粒(高音母)②良好③高音④口縁部	沈縞・縄文L R。	加賀利E 3
4	X 96 Y 83	①中粒(白色鉱物)②良好③灰地④胸部	沈縞・縄文R L。	加賀利E 3
5	X 96 Y 84	①中粒(白色鉱物)②良好③にぼい縁④胸部	沈縞・縄文R L。	加賀利E 3
6	X 93 Y 102	①粗粒(白色鉱物)②良好③高音④網部	横筋縞文・縄文L R。	堀之内2
7	X 95 Y 104	①細粒(石英)②良好③にぼい縁④縁部	横筋縞文・平行沈縞内に施文L Rを充填。	堀之内2
8	X 95 Y 104	①粗粒(高音母)②良好③にぼい縁④縁部	横筋縞文・平行沈縞内に施文L Rを充填。	堀之内2
9	X 95 Y 104	①細粒(高音母)②良好③明黄縞④縁部	横筋縞文・平行沈縞内に施文L Rを充填。	堀之内2
10	X 97 Y 105	①粗粒(石英)②良好③にぼい縁④口縁部	4条の平行沈縞・縛き。	加賀利B 1
11	X 105 Y 89	①細粒(白色鉱物)②良好③暗赤縞④縁部	平行沈縞・縄文L R。	加賀利B 1

Tab. 3 繩文時代石器観察表

番号	出土位置	器種	長 幅 厚 底さ	石 材	備 考
1	X 94 Y 101	打製石斧	9.7 5.7 1.6 95.9	黒色頁岩	両側縁に深彫刻溝がみられる。
2	X 105 Y 96	打製石斧	9.7 7.5 2.8 226.7	家賀安山岩	表面に自然模様を残す。

Tab. 4 古墳～平安時代遺物観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ	①胎 土 ②焼成 ③色 調 ④既存	器 形・製作技術の特徴
			□径・高さ		
1	H - 2	須恵皿	15.3 3.1	①中粒②良好③灰白④1/4	外表面縦溝ナメ。底部右回転糸切痕。
2	H - 2	須恵杯	12.1 3.5	①中粒②良好③灰白④3/4	外表面、内面ともナメ。底部右回転糸切痕。
3	H - 2	須恵杯	- (2.5)	①中粒②良好③灰白④底部のみ	外表面縦溝ナメ。底部右回転糸切痕。
4	H - 2	七輪壺	- (7.0)	①中粒②良好③灰白④底部のみ	外表面削り目。
5	H - 3	須恵皿	15.1 2.3	①中粒②良好③灰④完形	外表面縦溝ナメ。底部右回転糸切痕。
6	H - 3	土師舟	12.4 3.5	①中粒②良好③機④H形完成	外表面ナメ。
7	H - 3	須恵杯	11.4 3.3	①中粒②良好③灰白④口縁部1/3欠損	外表面縦溝ナメ。底部右回転糸切痕。
8	H - 3	須恵碗	14.6 6.6	①細粒②良好③灰白④口縁部1/4欠損	外表面、内面ともナメ。底部右回転糸切痕後調整。
9	H - 4	土師皿	12.7 2.2	①中粒②良好③機④1/2	外表面ナメ。
10	H - 4	須恵碗	13.2 5.1	①中粒②良好③灰白④ほぼ完形	外表面、内面ともナメ。
11	H - 4	土師杯	12.2 4.4	①中粒②良好③灰白④口縁部4形	外表面縦溝部横ナメ、他ナメ。内面指圧痕。
12	H - 4	須恵碗	- (3.0)	①中粒②良好③灰白④底部のみ	外表面縦溝ナメ。底部右回転糸切痕後調整。
13	H - 4	土師碗	14.0 (6.7)	①細粒②良好③にぼい縁④口縁⑤口縁部	外表面ナメ。
14	H - 4	須恵碗	16.5 7.9	①中粒②良好③灰④1/3	外表面縦溝ナメ。底部右回転糸切痕後調整。
15	M - 11	土師杯	11.9 3.7	①中粒②良好③機④1/4	外表面ナメ。
16	M - 16	均等両開 中継茎抜刀 無空鋒		関東の既存量が遼く開闢であるか微妙であるが、浅く開闢から切れ込んでいる可能性が高いと考え均等開闢とした。 茎部分も特にその先端部がほとんど失失しているので、その底部の形状は不明であるが、茎の幅はやや狭くむけ細くなる形状であるので中継の茎とした。均等両開刃刀の中では大きめで全長80.4cmを有する。他の部位の法量を示すと基長7.1cm・茎端幅1.6cm(推定)・茎元幅2.4cm・茎厚0.9~0.4cm・刀部長73.3cm・刃部幅3.1cm・刃部厚0.45~0.5cmである。重量に関しては鏡が多く測定しなかった。無空鋒が出土しておりこの刀とセットになるものである。法量、長さ(復元)8.0cm、幅(復元)5.6cm、内孔直径3.2mm、内孔底径1.8mm、厚み0.3mmである。 均等両開中継茎の抜刀、無空鋒よりみて年代的には6世紀後半～7世紀と考えられる。	

註) 各表の記載は以下の基準で行った。

- ① 胎土は粗粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、細粒(2.0mm以上)とし、特徴的な胎物が入る場合に胎物名を記載した。
- ② 焼成は極良・良好・不良の3段階とした。
- ③ 色調は土器外表面で観察し、色名は新規土色帖(小山・竹原1976)によった。
- ④ 大きさについての単位はcm、gであり、既存値は( )で示した。

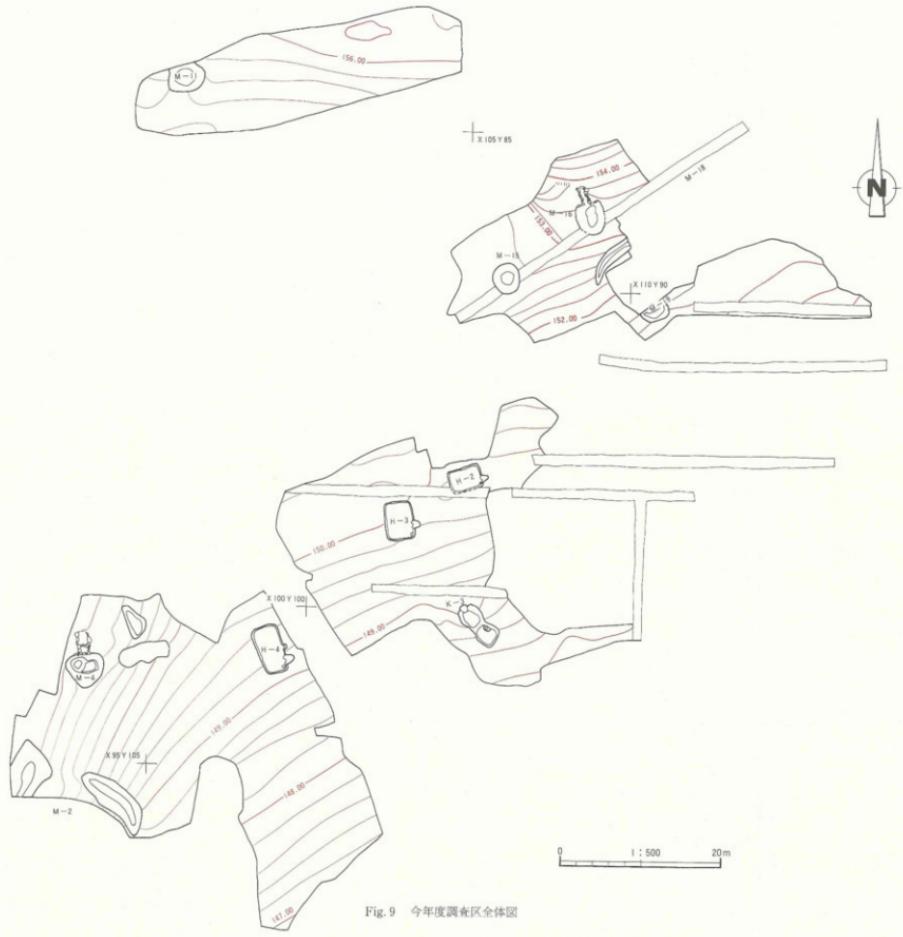


Fig. 9 今年度調査区全体図

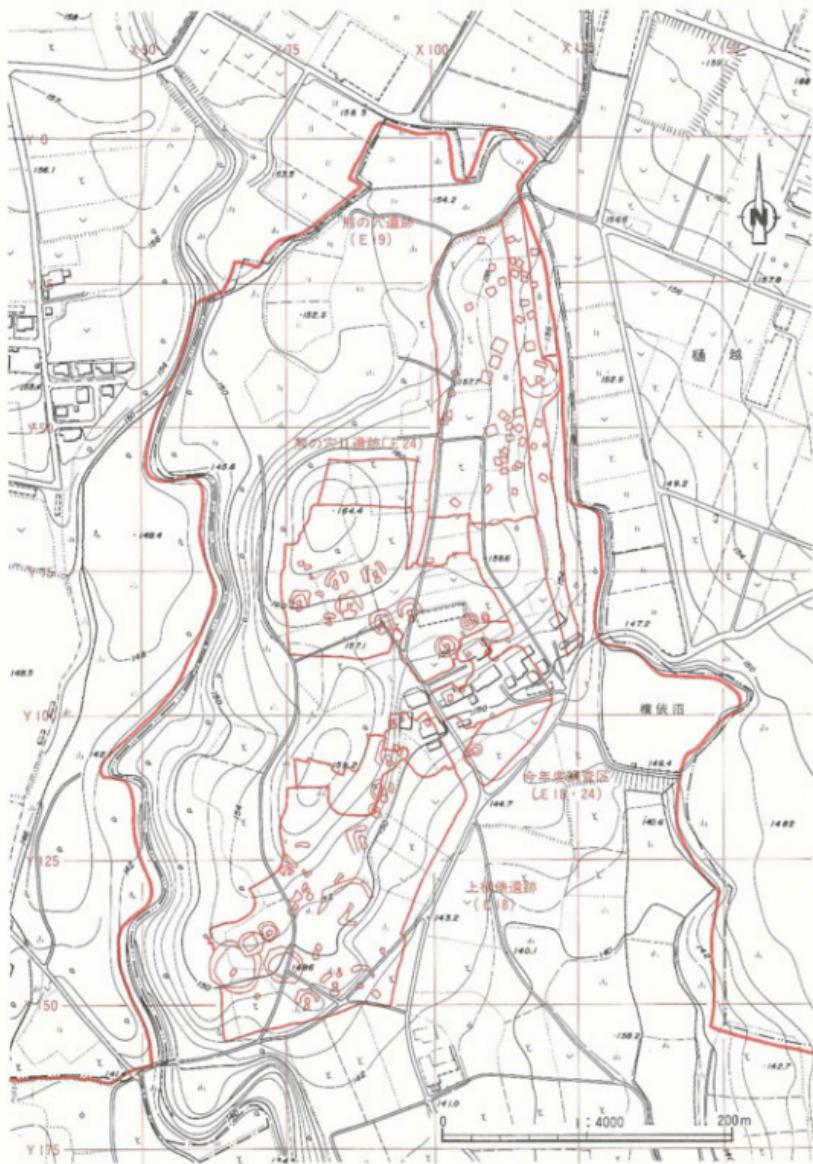


Fig.10 熊の穴・上横堀遺跡遺構全体図

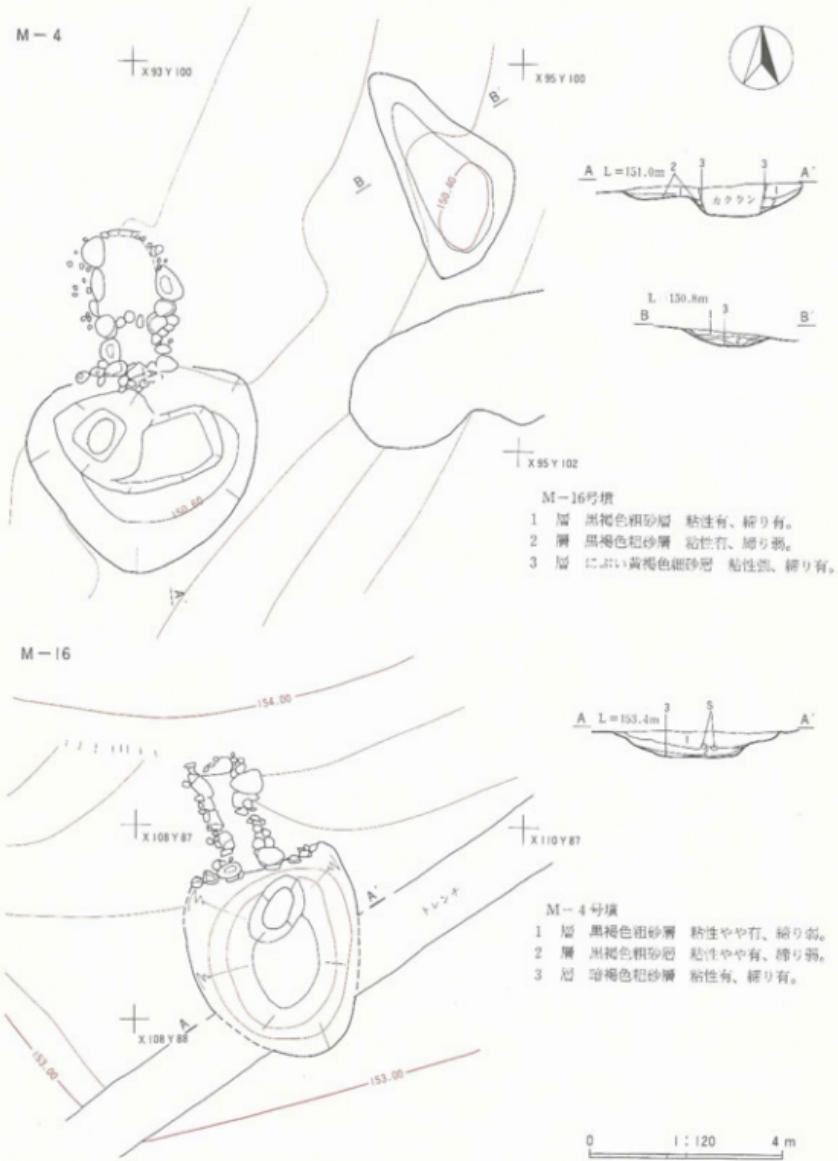


Fig.11 M-4・16号墳墳丘図

M-2

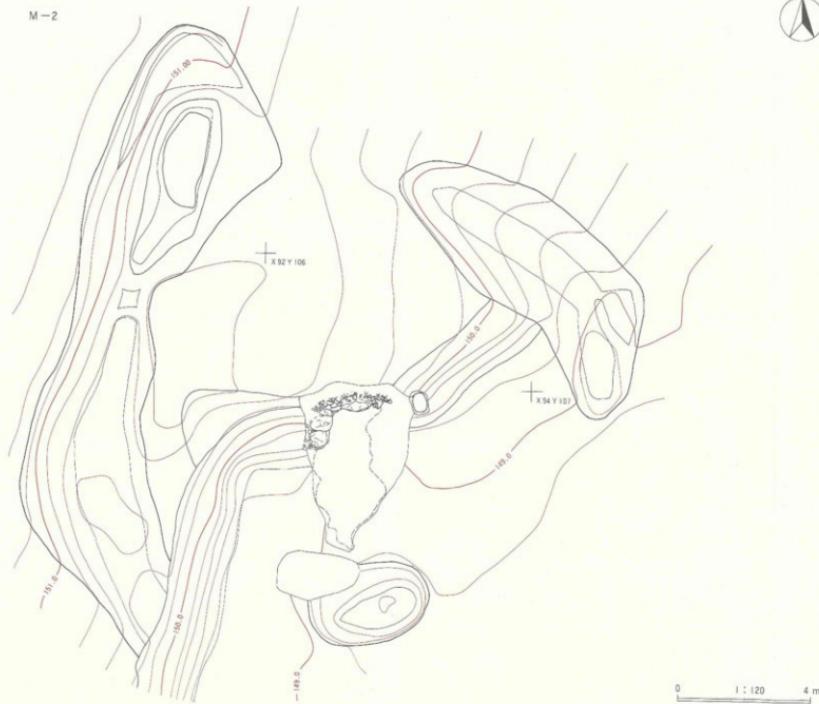
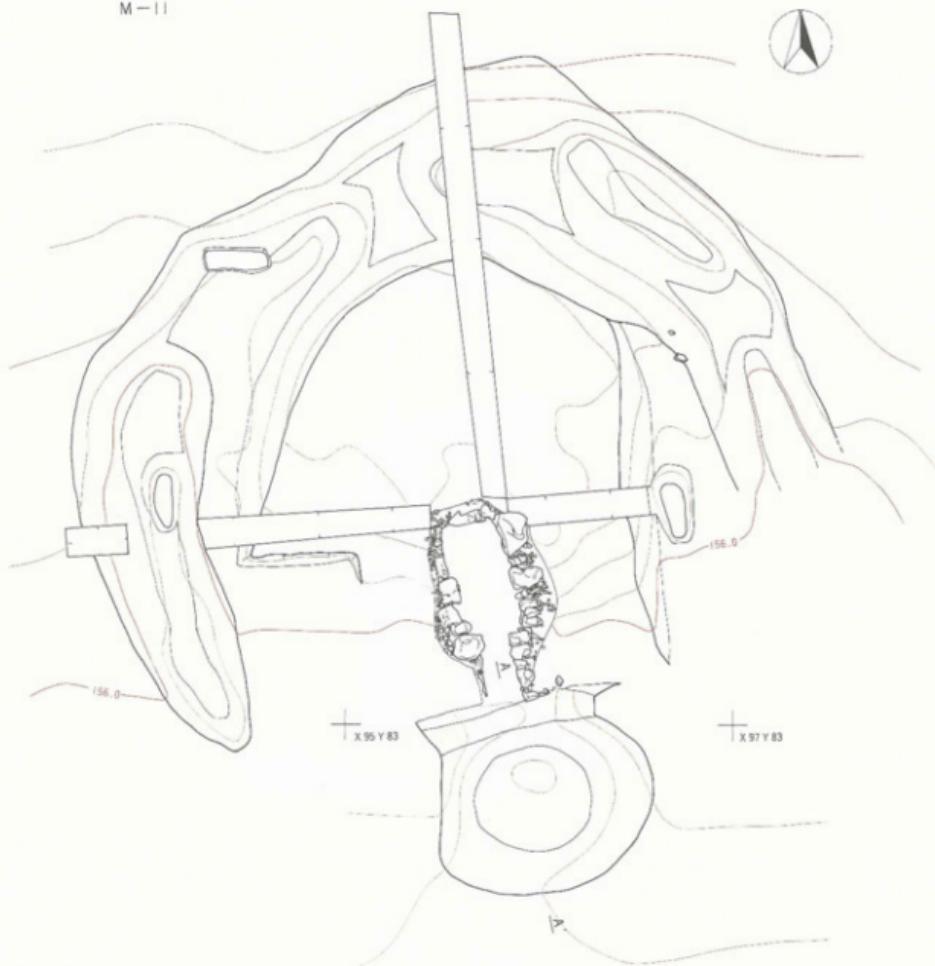


Fig.12 M-2号填墳丘図

M-11



M-11号填

- 1 冠 黒褐色細砂層 粘性弱、絆り弱い。
- 2 層 黒褐色細砂層 粘性弱、縛りあり。
- 3 基 暗褐色細砂層 粘性あり、縛りあり。



0 1 : 120 4m

Fig.13 M-11号填丘図

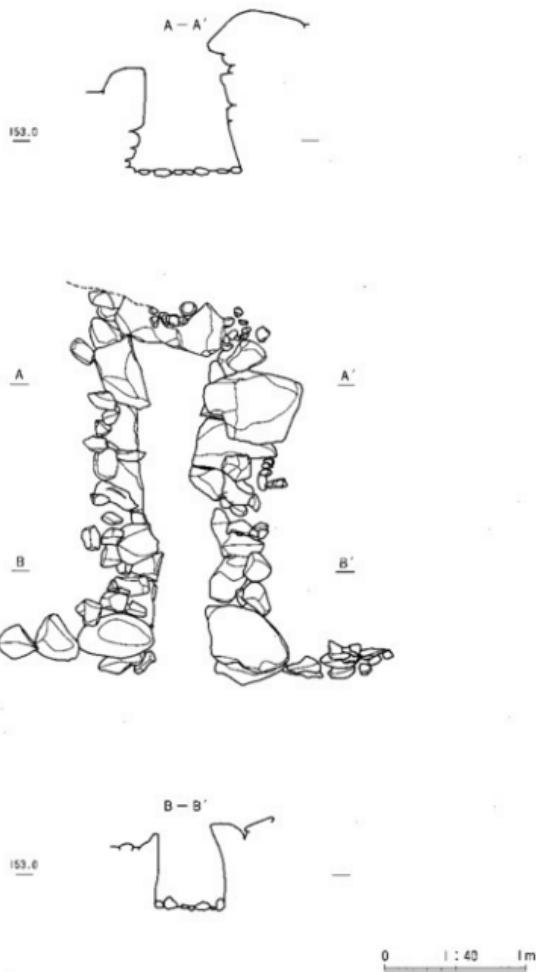


Fig.14 M-16号墳石室平面図

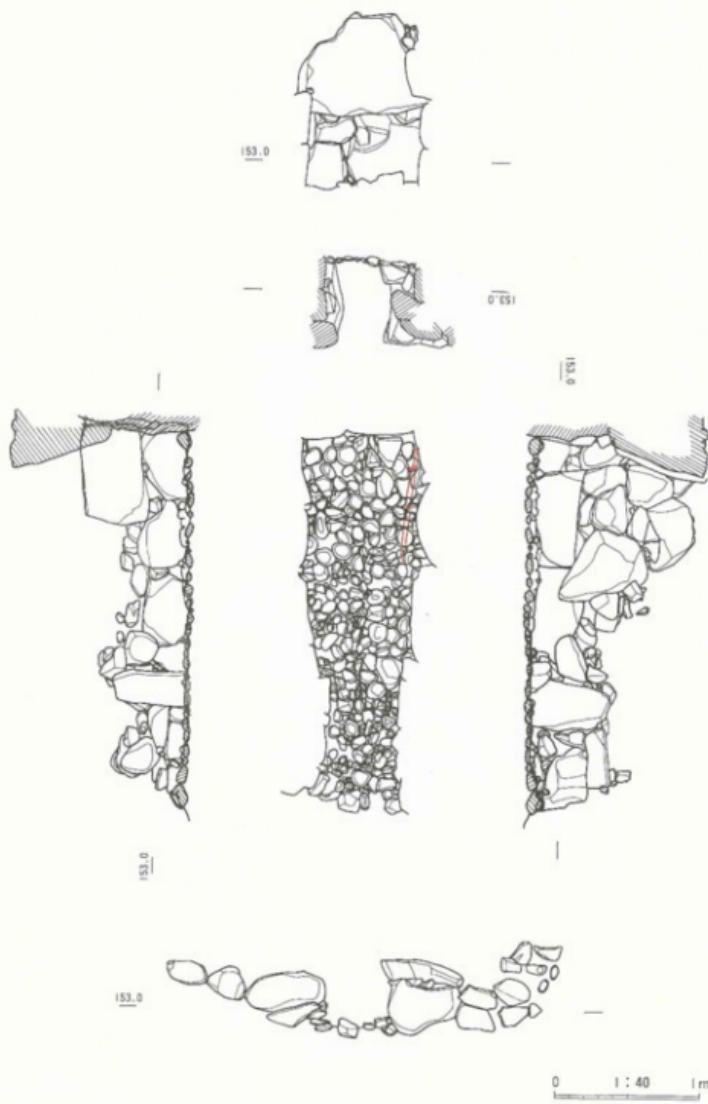


Fig.15 M-16号墳石室展開図

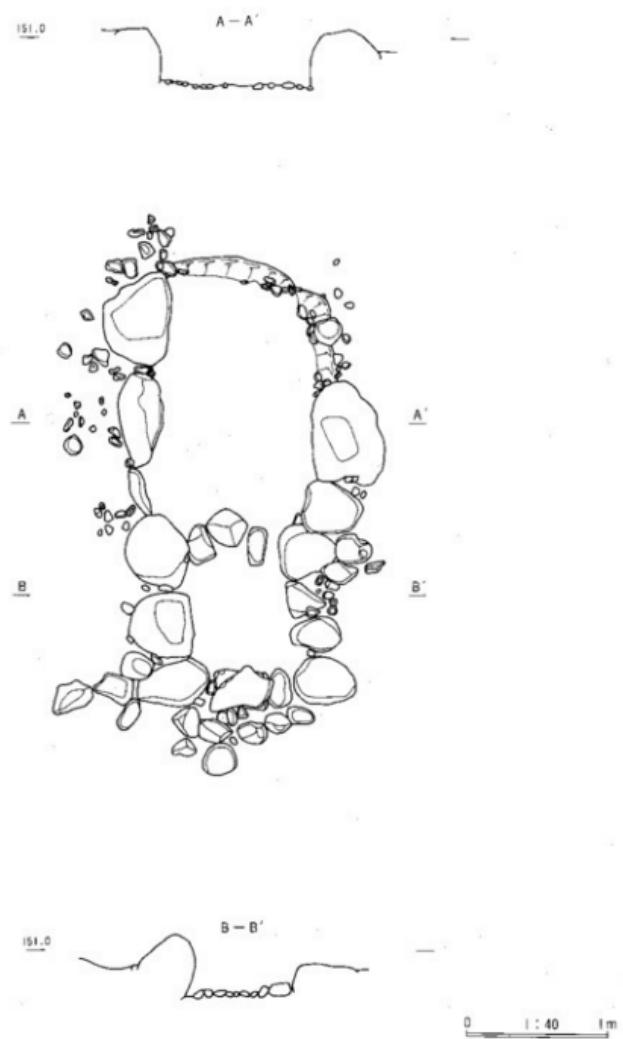


Fig.16 M-4号填石室平面图

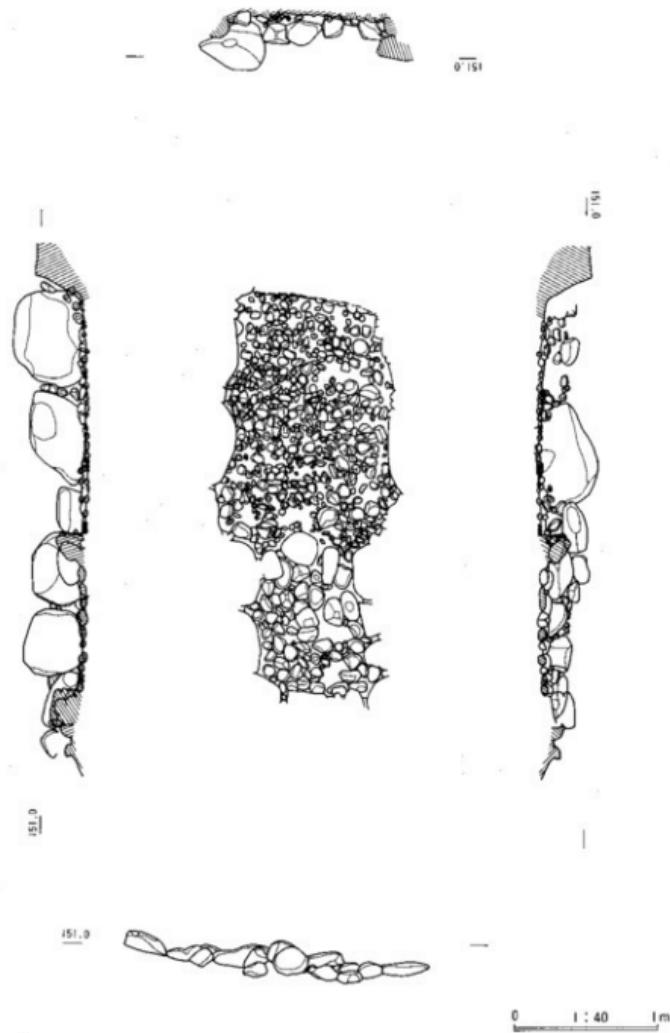
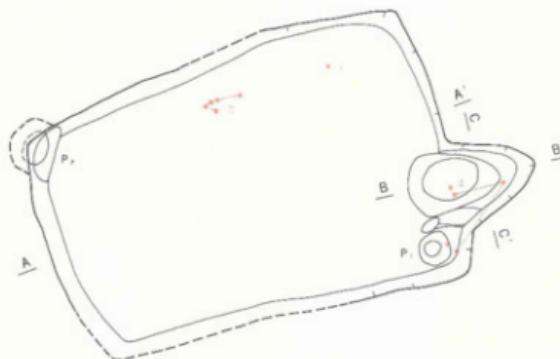


Fig.17 M-4号填石室展开図

H-2



A L = 150.3m



A'

0 1:60 2m

B L = 150.1m



B'

H-2号住居址

- 1 層 黒褐色細砂層 粘性弱、縛まり有り。
- 2 層 黒褐色細砂層 粘性有、縛まり有り。
- 3 層 黒褐色細砂層 粘性有、縛まりやや有り。
- 4 層 黒褐色細砂層 粘性有、縛まり有り。
- 5 層 黒褐色細砂層 粘性有、縛まり有り。



C L = 150.1m ハードロック ブロック C'

H-2号住居址電

- 1 層 黒褐色粗砂層 粘性有、縛まり有り。
- 1 a 層 暗褐色粗砂層 粘性有、縛まり強い。
- 1 b 層 黑褐色粗砂層 粘性弱、縛まり強い。
- 2 層 黑褐色粗砂層 粘性有、縛まり強い。
- 2 a 層 暗褐色粗砂層 粘性有、縛まり有り。
- 2 b 層 黑褐色細砂層 粘性有、縛まり有り。
- 3 層 黑褐色細砂層 粘性有、縛まり弱い。
- 4 層 黑褐色細砂層 粘性有、縛まり弱い。

0 1:30 1m

Fig.18 H-2号住居址

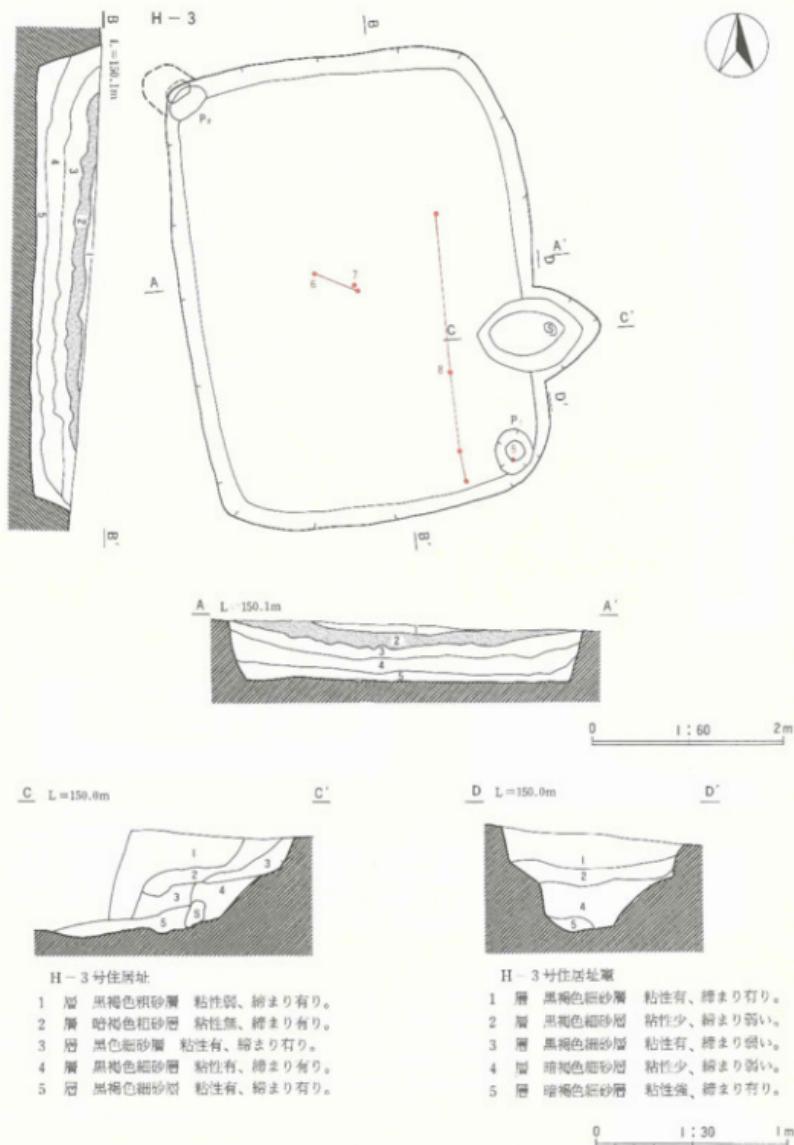
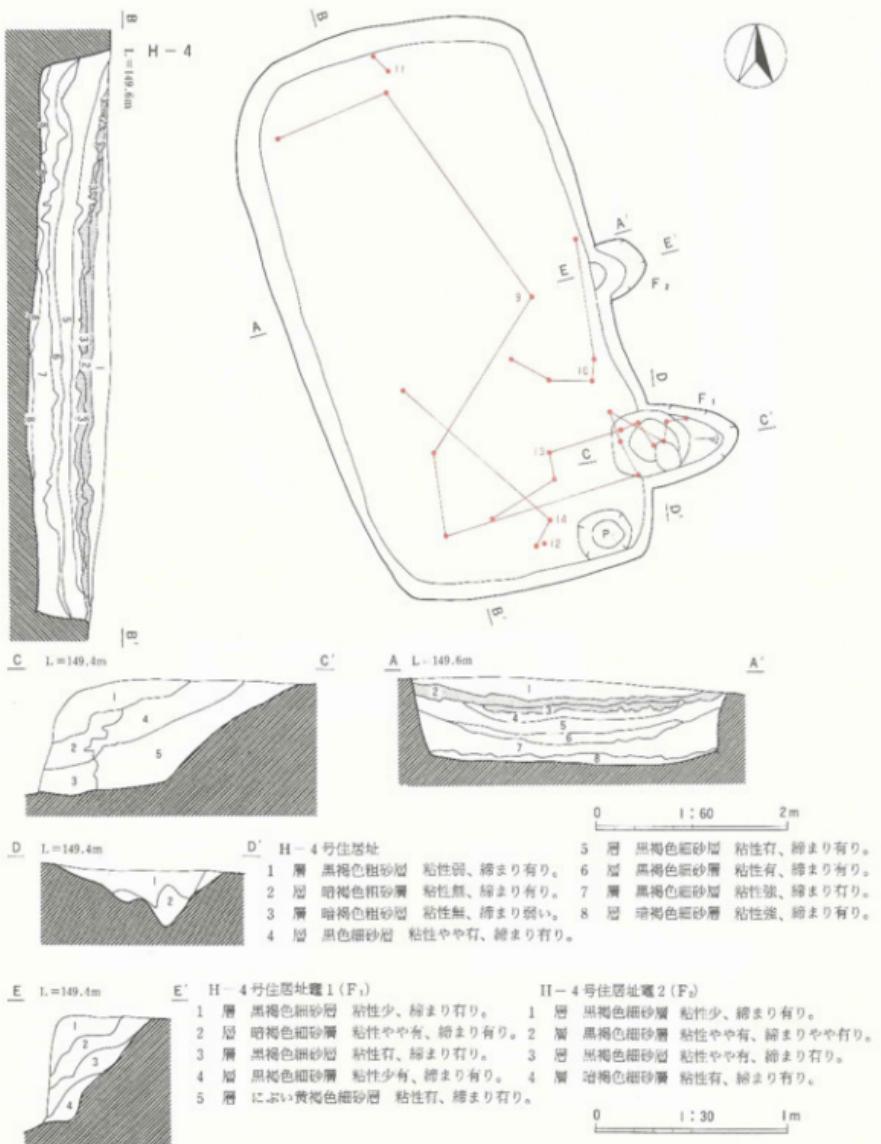
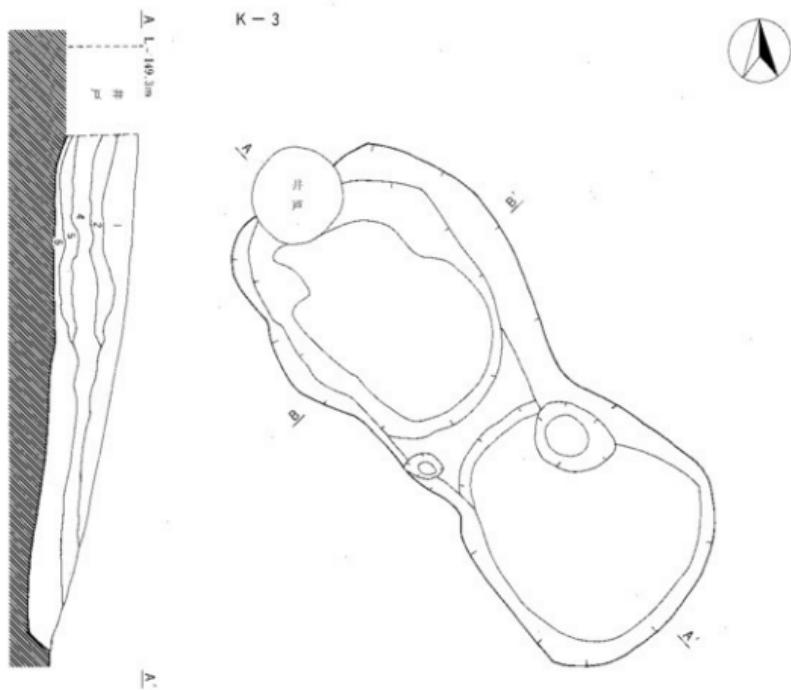


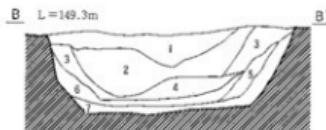
Fig.19 H - 3 号住居址





K-3号炭窯址

- 1 層 黒褐色細砂層 粘性無、締まり弱い。
- 2 層 褐色細砂層 粘性無、締まり弱い。
- 3 層 明赤褐色細砂層 粘性無、締まり弱い。
- 4 層 赤褐色細砂層 粘性少、締まり弱い。
- 5 層 褐色細砂層 粘性無、締まり弱い。
- 6 層 黒褐色細砂層 粘性無、締まり弱い。
- 7 層 暗褐色細砂層 粘性やや有、締まり有り。



0 1 : 60 2m

Fig.21 K-3号炭窯址

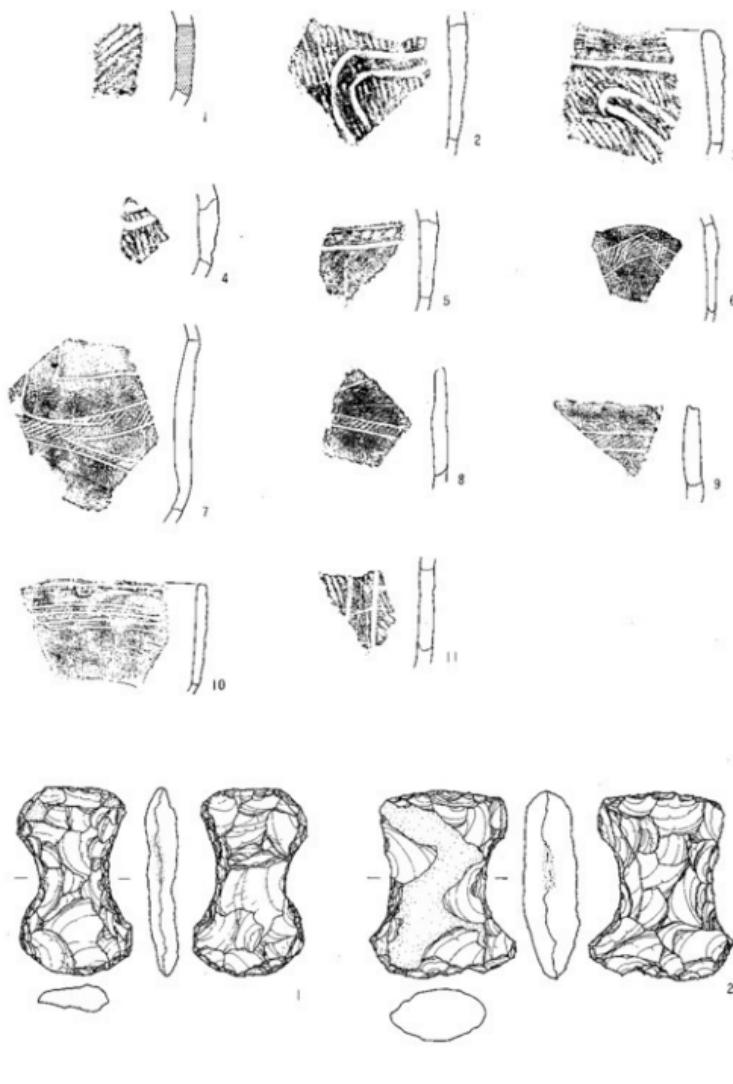


Fig.22 縄文時代の遺物



Fig.23 古墳時代以降の遺物



1. M-16号墳主体部（南東から）



2. M-16号墳主体部検出状態（南東から）



3. M-16号墳主体部（南東から）



4. M-16号墳主体部（南東から）



5. M-16号墳（南東から）



1 . M-16号墳鉄刀出土状態（南西から）



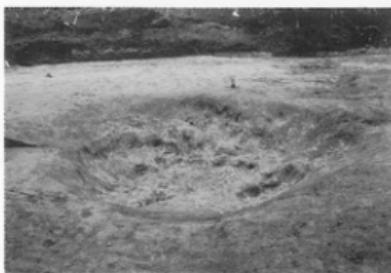
2 . M-16号墳鉄刀出土状態（西から）



3 . M-16号墳鉄刀出土状態（西から）



4 . M-16号墳鉄刀出土状態（西から）



5 . M-15号墳前庭部（南東から）



1. M-17号墳（南東から）



2. M-17号墳周堀セクション（南西から）



3. M-17号墳（南東から）



4. M-18号墳周堀セクション（北西から）



5. M-11号墳前庭部（南から）



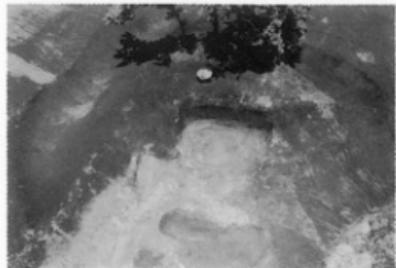
1. M-4号墳土部 (南から)



2. M-4号墳主体部 (南から)



3. M-4号墳 (南西から)



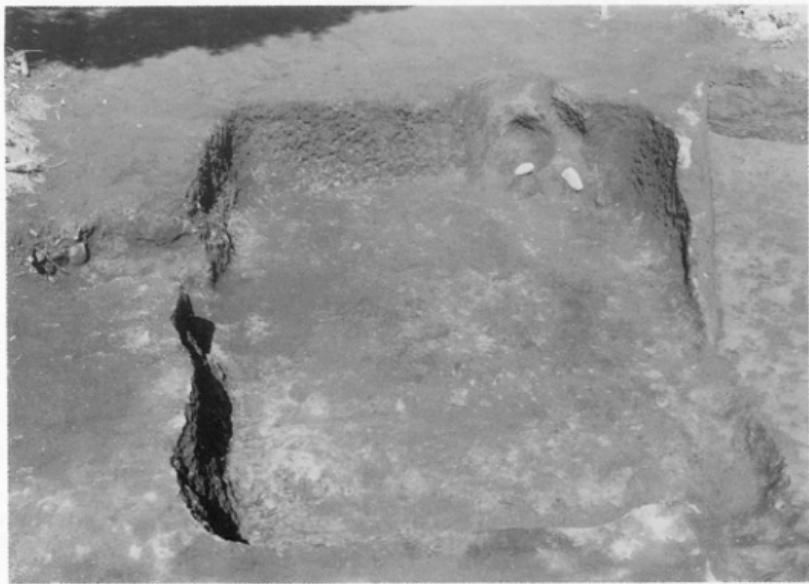
4. M-2号墳 (南から)



5. M-2号墳周縁 (南東から)



1. H-2・3号住居址（西から）



2. H-2号住居址（西から）



1. H-2号住居址（西から）



2. H-2号住居址遺物出土状態（南から）



3. H-2号住居址カマド（西から）



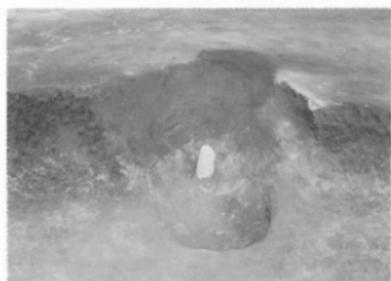
4. H-2・3号住居址（南から）



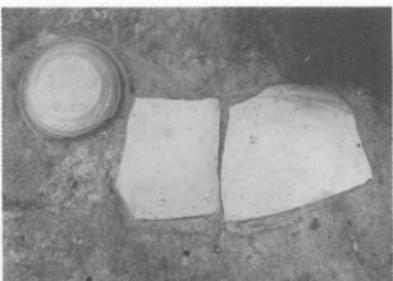
5. H-3号住居址遺物出土状態（北から）



1. H-3号住居址（西から）



2. H-3号住居址カマド（西から）



3. H-3号住居址遺物出土状態（南から）



4. H-3号住居址遺物出土状態（北東から）



5. H-3号住居址遺物出土状態（南から）



1. H-4号住居址（西から）



2. H-4号住居址カマド1（西から）



1. H-4号住居址カマド1(東から)



2. H-4号住居址カマド2(西から)



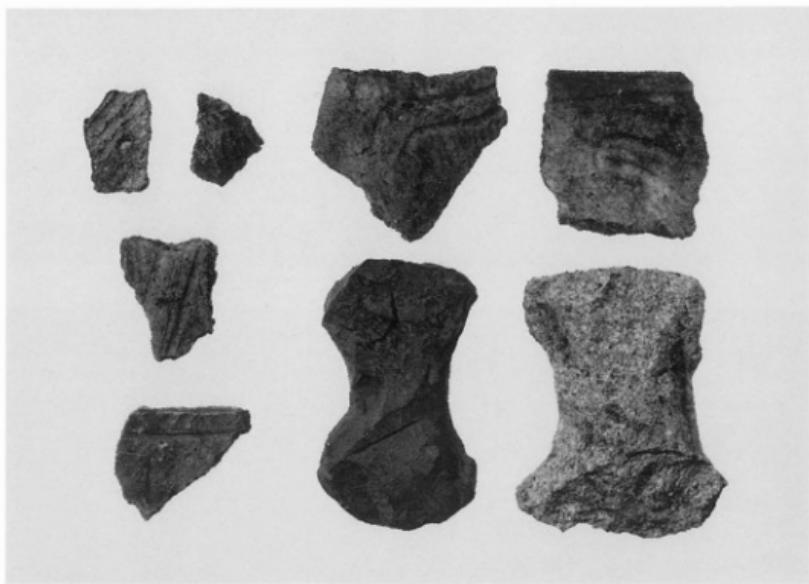
3. 熊の穴II遺跡試掘トレンチ全景(南東から)



4. K-3号炭窯址(南東から)



5. 本年度調査区全景(南西から)



1. 縄文時代の遺物



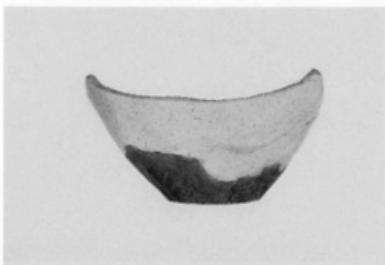
2. H-2号住居址(1)



3. H-2号住居址(2)



4. H-2号住居址(3)



5. H-2号住居址(4)



1. H - 3 号住居址(5)



2. H - 3 号住居址(6)



3. H - 3 号住居址(8)



4. H - 3 号住居址(7)



5. H - 4 号住居址(9)



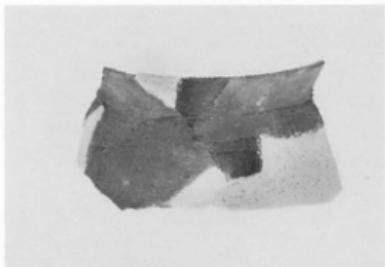
1. H-4号住居址00



2. H-4号住居址01



3. H-4号住居址02



4. H-4号住居址03



5. H-4号住居址04



6. M-11号填(15)



7. M-16号填(16)

## 調査要項

遺跡名称	横儀遺跡群（よこだわらいせきぐん）
上横儀遺跡（かみよこだわらいせき）	…1・2・3・4 E18
熊の穴II遺跡（くまのあなにいせき）	…2・3・4 E24
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町57-3番地ほか
調査期間	平成4年5月6日～平成4年6月8日 平成4年10月5日～平成4年10月7日
調査面積	3,000m <sup>2</sup>
開発面積	550,000m <sup>2</sup>
調査原因	荒砥工業団地造成
調査依頼者	前橋工業団地造成組合 管理者 小寺弘之
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 有坂淳
事務局	事務局長 町田重雄 事務局次長 高橋正男 財務係員 高橋賢靖 井上敏夫 管理係員 國部守央 庶務担当 須田みづほ 小濱恵子
調査担当者	都所敬尚 新井真典 上野克巳
調査参加者	阿部こう 阿部シゲ子 版島民弥 江口よしの 火野京子 落合高男 木村かね子 喜楽トヨ 桐谷秀子 久保田前一郎 小島勝雄 小沼豊子 小沼はづ 鈴木民江 須藤か津え 田口桂子 多田啓子 郡丸主女作 長岡徳治 原島なか 鶴島透司 堀越晴子 松倉菊江 松倉りつ 柳井晶子
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋工業団地造成組合 青木正幸 版島鈴男 版塙誠 桜南順一 加郡二生 神村達 亀山季弘 岸田治男 小島純一 小菅裕夫 杉山秀宏 間根吉晴 大工原豊 田口正美 田中隆明 千明徳至 柳イズミトリス 技研測量設計株式会社 柳古跡調査研究所 スナガ櫻境湖設 たつみ写真スタジオ プラス株式会社 (五十音順敬称略)

## 横儀遺跡群 VI

平成5年3月20日 印刷

平成5年3月25日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4

T E L. 0272-31-9531

印 刷 上海印刷工業株式会社



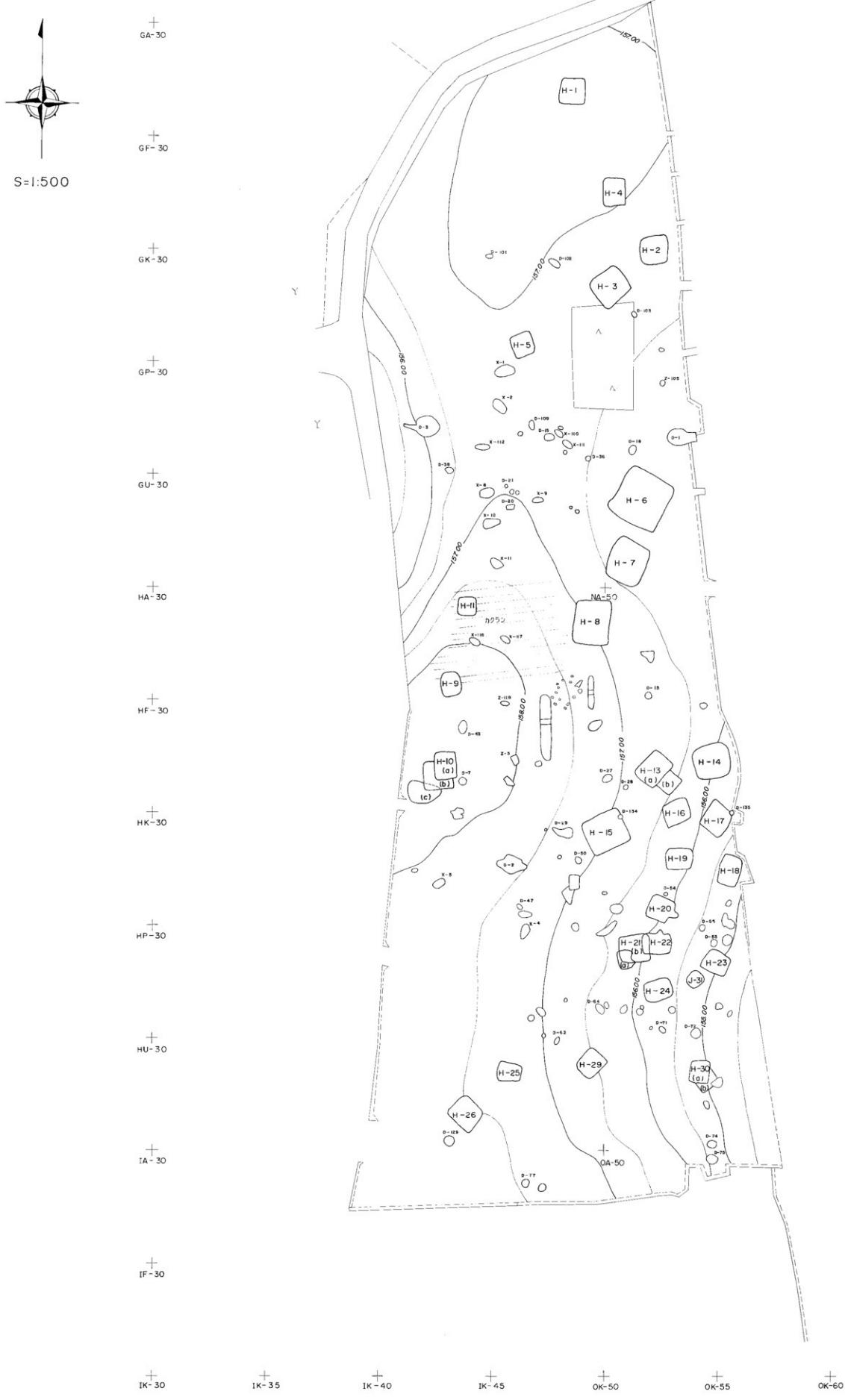








# 熊の穴遺跡全体図



# 上横俵遺跡全体図

